

PYの存在のお陰で、11か国それぞれの事情や異なる災害のリスクを扱うことができました。

小グループのディスカッションは、PY同士の緊密な関係を築くことに役立ち、また、誰もがグループでの学びや発見を、他者の前で発表する機会がありました。リーダーシップを発揮する上で、人前に立ってプレゼンすることは必要不可欠なスキルであり、私を含め、皆がコースを通じて自信を付けることができました。

多くのPYが、英語力や、専門的な内容の理解に課題を感じていました。こうした声がコース・ディスカッション運営委員に寄せられたので、毎回セッション後に行われるファシリテーターとの打合せで議論し、必要なスキルを向上させるための文献の提供や、JPY向けの補講が行われました。これらの対策によって、より積極的にコースに参加できるようになり、防災に対する理解も深まったという感想が多くのPYから寄せられました。個人的には、各セッションでどのような学びがあったかを振り返り、自習できたことが有意義でした。

コースで印象に残っている活動の一つは、私たちが当時置かれていた環境、すなわちにっぽん丸を、一つの街に見立て、実用的なハザード・マップの作成をしたこと

です。小グループごとに、災害を想定するアクティビティを行い、災害時、船内でリスクとなり得る場所を検証した上で、どのように災害に備えるべきか、対策を話し合いました。これは手軽に、しかし活発に本格的な議論ができることから、PYが自国に持ち帰り、事後活動の一環としてそれぞれの場所で活用できるアクティビティとなりました。また、東日本大震災に関わったNGOや市民団体の経験を基にした教材は、近年の世界で起きている事件を分析することに役立ちました。これらのアクティビティは、課題別視察で見聞きしたことを振り返り、プロジェクトマネジメント・セミナーやリーダーシップ・セミナーでの学びを実践するとても良い機会でもありました。

PYは、災害マネジメントの分野において実用的な知識を身に付けることができました。私たちは地域が災害に対してどのように備えるべきかを理解し、効果的に、かつ人々の尊厳を守りながら危機に対応する術を学ぶことができました。私たちが自国に戻り、国際的なネットワークに支えられながら、それぞれが暮らす地域で学びを実践する上で、このコースでの学びはかけがえのない財産となるでしょう。

教育コース

副題：人生を豊かにする教育的リーダーシップ

ファシリテーター：ポール・ファリス

参加青年：42名（JPY 22名、OPY 20名）

1. 目的とねらい

コースの目的

教育とは、仕事に就くためにただ情報を詰め込むことではない。教育者たるリーダーは、急速に移り変わるこの時代において、人々のより良い学びや充実した人生やキャリアの発見にどのように寄与することができるだろうか。私たちの未来は、新たな社会現象を見据え、社会における役割を築くことで形作られる。人は誰もが人生において学習者であり、またリーダーでもある。このコースを通して、PYは教育的リーダーシップを日々の中で役立てることのできるスキルとして身に付ける。

教育的リーダーシップとは、経験や知識を求める姿勢や、地域や国際社会において、その規模にかかわらずこれらの経験や知識を分け与え、人々の豊かさや充実度の向上を支える姿勢を指す。教育的リーダーシップの柱となるものは何か。一つは、本当の自分を探し出すプロセスを支えることである。既によく知られていることだが、その人が本当に好きなことを見付けることができれば、人生はより豊かなものになるということがデータで証明されている。二つ目に、人が人生の中で遭遇する新たな環境において、その人の社会的役割を見出せる好奇

心や共感能力が挙げられる。三つ目の柱は、状況判断と、それらの場面に応じて求められる学び、導き、共有する精神とそれを可能にするツールである。本コースではそれらのツールを共有するとともに、PYがそれぞれの地域や国際社会で担う役割を果たすために必要な能力を養う。

コースのねらい

コースを通して、PYは効果的な教育方法及び組織の運営方法やコミュニケーション戦略、問題解決に必要な視点、国際社会や国内における教育課題の解決方法、さらに、支援や資源、気付きを共有するための国際的ネットワークの構築方法を探求する。これらのスキルや能力を身に付けることにより、PYは教育的リーダーシップを発揮し、それぞれの地域において社会貢献できるようになる。

2. 事前課題

2-1. 自己紹介

コースのメーリングリストを通じて、好きな方法で自己紹介をすること。

2-2. 2分間授業の準備

あなたが他のPYと共有したいと思うこと(スキル、特技、ニュース、ゲーム、運動、アイデア、何かをやる時のコツなど)を2分間の授業で教えられるように準備する。同じ授業について、言葉を使って教える練習、言葉を使用せずに教える練習をすること。もし英語と母国語以外の言語を知っていたら、その言語で教える準備もしておくこと。PYは準備した2分間授業を実際にコース中に行う機会がある。

2-3. ディスカッション準備

下記は各セッションで行うディスカッションの議題に

ついて準備をするための課題である。必要に応じて、他のPYの前で説明するためにそれぞれの議題に対する回答や意見を書き、セッションに持参する。

- あなたが良い教育的リーダーだと思う人物の素養や性格を挙げ、なぜそれが大事かを説明する。
- 教育制度に影響を与える問題を三つ挙げる。
- あなたが解決が必要だと思う地球規模課題と、そう思う理由を答える。
- 学校教育と、公教育以外の場面、それぞれにおいてあなたが経験した良い教育体験、悪い教育体験とは何か。それぞれの体験を振り返り、なぜあなたがそう感じたかを説明する。

3. 5回のセッションの概要

セッション 1: 教育的リーダーシップとは	
目的とねらい	活動の内容
<p>PY同士がお互いをサポートし、信頼できる雰囲気を作る 優秀な先生になるために、また良い授業を行うには、どのような要素が必要かを考察する コミュニケーションの在り方と先入観がもたらす問題を明確化する</p>	<p>PYとファシリテーターの自己紹介 事前課題として準備してきた2分間授業を発表する 教育コースにとって不可欠な学びやコンセプトとは何かを議論する</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>PYは、コースを通してお互いをサポートし、信頼することを確認することができた。個人として、またグループ全体として言葉と行動でその意志を示した。 PYが無意識のうちに持っている先入観を理解するために、TED Talksの動画(デレク・シバーズによるミスコミュニケーションや、考え方・生き方の違いによって発生する問題に関するプレゼンテーション)を視聴した。 二人一組になり、コースの全員の前で事前課題として準備した2分間授業を実施し、特技やゲーム、アクティビティを発表した。ロシアの伝統ダンスやオーストラリアン・フットボールのパスの方法、折り紙の折り方など、様々なことを母語や英語、ボディランゲージを使ってパートナーに伝えた。様々な2分間授業から、効率の良い学び方やその理由について考察し、5個の要素にして発表した。学びに最も重要な要素として、「楽しませること」「繰り返すこと」「明確なコミュニケーション方法(言語やボディランゲージなどを駆使すること)」「聞き手は誰であるかを意識すること」「入念に準備をすること」が挙げられた。 「集団個人主義」について議論し、その意味について考えた。最も印象的だった意見として、「他者と行動を共にすることで自分自身を成長させることができ、一緒になって社会的な変化を起こすことができる」が挙げられた。 教育的なリーダーシップの基礎として、「APR」のコンセプトについて学んだ。APRとは、Anticipation(予測)、Participation(参加)、Reflection(熟考)の頭文字である。APRを繰り返すことによって、教育的リーダーとしてスキルを向上させ、より多くの成長の機会を得ることもつながることを理解した。また、その他のコンセプトとして「誘引(興味を刺激し、引き込むこと)の重要性」や「蜘蛛の巣(糸が幾重にも折り重なる蜘蛛の巣を象徴とした、PYが多様な経験や知識を折り重ねて教育的リーダーシップを発揮してほしいという教育コースのコンセプト)」を紹介した。</p>	
セッション 2: 地域を良くするための方法	
目的とねらい	活動の内容
<p>個人レベルの教育から国家レベルの教育問題に視点を移す それぞれのPYが、自国の教育問題について紹介し、それを踏まえ、自身がコースの中で何を成し遂げたいか理解する</p>	<p>日本のナショナル・プレゼンテーションやJapan Nightなどのイベントの際に、JPYの中でどのようにAPRが実践されていたのかを議論する 5~6人のグループに分かれて、下記二つの質問について議論する</p> <ul style="list-style-type: none"> • なぜ教育コースを選んだのか? • 自国が直面している教育問題は何か? <p>カナダ北部の先住民族であるイヌイットの伝統的な教育(狩猟した後の動物の処理の仕方)に関する動画を鑑賞する</p>

このセッションの主な学びと成果	
<p>前回のセッションの学びを復習しながら、PYは日本のナショナル・プレゼンテーションを題材に、APRのコンセプトを使って感じたことを共有した。</p> <p>5～6人の小グループに分かれて、自国の教育に関する問題を紹介し、それを踏まえ、なぜ教育コースを選んだのかを議論した。それぞれの国の教育事情を理解し、またお互いがどのような動機でコースに参加しているかを知ることができた。</p> <p>高等教育への進学と労働市場での需要の間で起こる摩擦や、タンザニアにおける教育の機会の不十分さ、日本の極端に短いインターンシップなど、教育にまつわる課題についてお互いから学んだ。</p> <p>イヌイットが、伝統文化である狩猟の仕方について、学校でどのように教えているかを動画鑑賞し、その土地の伝統がどのように教育に織り込まれているかを学んだ。</p>	
セッション 3: 問題解決のためにはどのような情報が必要か	
目的とねらい	活動の内容
<p>国家レベルの教育から世界レベルの教育問題に視点を移す</p> <p>世界各地で共通する、教育システムが抱える課題を見出す</p>	<p>今日までのSWYの研修や、他国のナショナル・プレゼンテーションについて振り返る</p> <p>「人生で最も重要な選択は、親を選ぶことである」という引用文について議論する</p> <p>世界中で起きている共通の話題や社会問題について、小グループごとに議論する</p> <p>コース・ディスカッションについて、セッション3までを振り返り、フィードバックを行う</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>前回のセッションから今回までの間に起きた研修中の出来事(バーレーン、ニュージーランド、UAE、チリ、タンザニア、メキシコのナショナル・プレゼンテーションやその他の研修、行事など)について、APRの手法を用いて学んだことを振り返った。</p> <p>PYはセッション1に続いて2分間授業を行い、教育の方法論や、自分以外の参加青年の教え方について、気付いたことを共有した。</p> <p>PYは、「人生で最も重要な選択は、親を選ぶことである」という文章の意味について議論した。この文章は議論を活性化させ、様々な論点に波及した。例えば、「親は選べないから、この文章の言葉は適切でない」という意見に始まり、「逆らうことのできない遺伝について」「生まれ育った環境が子供に与える影響」「家族の社会的経済的な地位は、その個人が人生で得られる機会を反映するか」など、様々な意見や議題に発展した。また、「親」という表現には、先生や恩師、その他の学びを与えてくれる人たちが含まれるのではないかと、という前提に立ち、論点を広げた。</p>	
セッション 4: 教育的リーダーとして、どのようにコミュニケーションを実践すべきか	
目的とねらい	活動の内容
<p>世界規模、あるいは国家規模の教育課題への取組について、議論する範囲を狭め、組織レベルでどのような解決策の実施ができるかを議論する</p>	<p>APR手法を用いて、ロシア、インド、スリランカ、オーストラリアのナショナル・プレゼンテーションを振り返る</p> <p>インドとスリランカのPYが、これから訪問国活動で訪れる母国の教育事情と、課題別視察で訪問する施設について短いプレゼンテーションを行う</p> <p>世界の教育問題について、ジェンダーやブラチナルールと照らし合わせて解決方法をグループで議論し、発表した(ブラチナルールとは「相手がしてほしい行動を、相手にすること」)</p> <p>個人を取り巻く、小さな範囲において、教育的リーダーシップが何を意味するのかを議論する</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>インド、スリランカのPYによるプレゼンテーションを踏まえ、国の代表として意見を言うことと、個人の見解を示すことの違いの重要性を理解した。</p> <p>スリランカとインドのPYが、それぞれの国の言語を教え、両国の教育システムと統計に基づくデータを紹介した。</p> <p>不平等、マインドセット、社会の事象を受けて変化する教育システムなどを切り口に、小グループでディスカッションした。性別は重要な議題の一つとなった。多くの国で、教師や看護師などの職には女性が多く就き、弁護士やエンジニアの仕事は男性が多いことから、性別が、人々に対して、社会のどのような分野で仕事をするか、ある程度決める役割を担っていることが分かった。この課題を克服する方法として、PYは、意識改革のためのキャンペーンの展開や男性・女性それぞれの成功事例を広く示すことなどを挙げた。それらの解決策はいずれも、女性や青少年が、社会のあらゆる意思決定の場面において、今より多くの選択肢や権利を持てるようになることを示唆していた。</p> <p>TED Talksの動画(ドラー・ダドリーによる日常的なリーダーシップとリーダーシップの意味を題材としたプレゼンテーション)を視聴した。PYは、リーダーシップとは大きな問題を解決する要素としてよく紹介されるが、宇宙規模で考えたとき、一人一人の小さな行動(例えば気付きや関心、教育的な行為など)が、誰かの人生を変えるような大きな力を持っていることを理解した。</p>	

セッション 5: 教育的リーダーシップの計画を作る	
目的とねらい	活動の内容
全てのセッションのまとめを行い、個人としてどのような学びが達成できたのかを振り返る	SWYを通して、自身が学んだことを、他のPYに対して授業する “ Interconnectedness ”(人と人との相互のつながり)が、コースの学びにどのような影響を与えたか議論する 教育と学びが、個人にとってどのような意味があるのかを考える
このセッションの主な学びと成果	
<p>SWYを通して、自身が学んだことを、他のPYに対して授業をし、その内容について話し合った。例えば、あるPYは、スリランカで訪問した視覚障害者と聴覚障害者の学校で学んだ手話のアルファベットを披露し、他のPYにそれを教えた。この授業から、教育的リーダーは、ちょっとしたツールを使って色々な方法で学びの環境を作ることができることを改めて理解した。その後、続く振り返りでは、授業や情報に、自分の感情や気持ちを込めることが教育リーダーにとって大切であると学んだ。</p> <p>3~4人の小グループに分かれ、“ Interconnectedness ”について議論した。その結果、PY全員が、人、場所、情報とつながっていることを再認識し、それらのつながりはこれからのPYたちの人生を結ぶ糸であることを実感した。PYからは、「船での研修を通して、個人的な蜘蛛の巣が広がった」「教育リーダーは小さいアクションの積み重ねで、やがて誰でも大きなインパクトを起こすことができると感じた」「 “ Interconnectedness ”は多くのPYが心を開いて、自身の人生経験について話をする原動力になっていた」「自分が持っている特技に気付くことができたので、自分らしさをいかして活動できるようになった」「以前、英語を話した時に苦い経験があって公の場で英語を話すことにコンプレックスを持っていたが、今は人前で英語を話す自信が付いた」「自分が家庭内で抱える問題について話を聞いてもらえたことで、教育コースのPYが家族のように思えるようになった」など、自分自身の変化について意見が挙がった。</p> <p>複数のPYが、「こんなにも短期間の間に、お互いをサポートし信頼し合えるようになるとは思わなかったが今、世界中にサポートと信頼の輪があることを感じられる」という感想を述べた。</p> <p>「動くことは活動の潤滑油(“ motion is lotion ”)」というコンセプトについて議論した。常に活動的で前向きでいること、精神的にも肉体的にも活発であることが、健康的な生活を送る一番のコツであることを学んだ。それを踏まえ、あるPYは、いつでも新しいアイデアと向き合い、常に新鮮な気持ちでいることが、国際感覚を保ち、見識を広げる方法であるという意見を共有した。</p> <p>人生では、様々な場面で力関係が表れる。社会的地位による力関係もあれば、肉体的又は経済的な意味での力関係もある。時には秘密や噂話などが力関係を構築することもある。いずれの場合も、優位な立場にいる人が、自分よりも弱い立場にいる人をどのように扱うかによって、本当の性格が表れる。だれかが落ち込んでいるときや物事がうまくいっていないときに、その人のことを不当に扱うようなことをすることは、教育的リーダーとしてあってはならない。本当の教育的リーダーは、優位な立場にいる時に、人をどのように扱うかで真のリーダーシップが問われるのだということを理解し、教育コースが幕を閉じた。</p> <p>最後に、PYは、人生に必ずある様々な変化の中で、社会、組織、学校、地球、その他全ての人間関係で、自身が教育的リーダーとして有する力を信じ続けることを、ファシリテーターから奨励された。そして、その力を誰もが持っているからこそ、人々がお互いに影響し合うこの世界において、安心して、公平に分かち合える環境の創造に尽力することが求められているということをも再認識した。</p>	

4. ファシリテーターのコメント

教育コースは、好奇心と共感力のある優れたリーダーで構成されていた。経験やアイデアや情熱を、信頼と支援が構築された安全で平等な楽しい環境の中で共有し合うことで、教育的リーダーシップの「蜘蛛の巣」を広げることができた。PYには豊かな糸を折り重ねながら知的に、また感情的に成長してほしいという思いから、教育コースの成長を表す比喻として「蜘蛛の巣」という言葉を用いた。

セッション1では各自2分間の授業を行い、教育的リーダーとして成功するために必要なスキルを確立した。各自ゲームや特技やパフォーマンス、歌、その他の何かしらの活動を教えるプレゼンテーションを行った後、教育的リーダーシップにとって必要な、下記の三段階の手法を学んだ。

予測 (Anticipation) : 教育者、学習者、リーダー、オブザーバーなど誰にとっても必要とされる、先々の活

動や行事に対する事前準備。

参加 (Participation) : 情熱を持って行動し、自分自身がその瞬間に在ること。

熟考(Reflection) : 現状を把握し、理解と改善するために個人や集団、社会が回想すること。その結果は、次の予測の段階へと続く。

この三段階の手法(以下、APRサイクル)は、教育的リーダーシップに必要な能力を磨くために循環的に行う取組である。ここではAPRサークルとコロソボにおける盲・ろう学校への訪問を用いて、コースの学びについて述べたい。

予測 (Anticipation)

学校訪問に備え、教育チームのスリランカPYが、自国の基礎情報や、盲・ろう学校について説明を行った。セッション1では、一人一人の参加を促すことについて検証した。人々が輝ける場を創造することが教育的リー

ダーシップの重要な側面である。セッション3、4では、教育の機会の不均等を含め、教育におけるグローバルな課題とその解決方法について検証した。これらの議論は、コロomboにおける盲・ろう学校訪問への準備の基礎となった。

参加 (Participation)

教育コースのPYは、学校に到着すると、一列に並び花を持った生徒たちに歓迎され、一人一人が生徒と手をつなぎながら学校の中へ案内された。そして目の不自由な生徒がシンハラ語と英語で文字を打ち込むコンピュータ教室へと向かった。コンピュータの数は全生徒に行き渡るには不足していた。その後、ろう学校を訪問すると、スピーチ、ダンス、音楽で歓迎を受けた。そこではろう学校の生徒たちから手話でスリランカの国歌を教えてもらい、生徒たちのヘアサロンで髪を結ってもらい、先生と教育方法について話し合った。教育コースを代表するPYは両学校の校長先生に謝辞を述べ、ささやかな贈り物と手紙を渡し感謝の気持ちを伝えた。

熟考 (Reflection)

学校訪問では好奇心が刺激された。共感力と共に、好奇心は誠実さと成功を導く二つの要素のうちの一つである。PYは、視覚や聴覚が不自由な生徒が自立した生活を送り選択の幅を広げられるようにするための思考と教育について、興味を持ち始めた。この学校訪問が、公平と平等についての議論を活性化した。殆どの国では法の下での平等が唱えられている一方で、PYは、自分たちは生徒に対して平等に接することができていないと感じた。なぜなら、自分たちは生徒に対して自分たちを優位な立場に位置付けていることに気付いたからだ。生徒があらゆる手段を駆使してコミュニケーションを取ろうとする姿を見て、PYはセッション3で学んだ「相手が望む方法で相手に接すること」というプラチナルールを思い出した。そしてPYは、生徒たちは、ただ他の人たちと同じ様に扱ってほしいのではないかと思うようになった。その気付きが、共感を引き出した。目や耳の不自由な生徒に対してだけでなく、意見や感情を上手に表現できず苦しむ教育チームの仲間に対する共感であり、チーム全体に大きな転換をもたらした。PYは自分たちの仲間の気持ちを真に理解し始め、地球における教育に対する夢について共に語り始めた。

この共感にあふれるディスカッションは、教育コースの最終セッションに影響を与えた。PYは、本物の教育的リーダーとは、立場に関係なく人を公平かつ平等に扱う人であると考えた。また人間の本质は、力関係の異なる関係性において自分が優位な立場にいる時に表れると発言した。人を立場の優劣で決して判断してはならないということは、教育的リーダーにとって非常に本質的

なことである。

セッション1から教育コースは“Collective Individualism” (集団的個人主義、一人一人の才能や特技や知恵や存在感を大切に集団主義) について話し合ってきた。より良い個人や社会のために、今ある環境において一人一人が専門性をいかしながら積極的に取り組む集団の力は、コロomboの盲・ろう学校のスタッフや生徒において明らかであった。

これが、私たち人間は、同じ場所と同じ地球で共生しているという、“Interconnectedness” という考え方に至った。この「つながっている」という感覚や学びを経て、PYは感情を共有し始めた。心の底からの生の感情を共有し合ったことで、自分の人生における教育的リーダーシップに関わるプラスやマイナスの様々な経験について、勇気を持って語り始めるようになった。このように個人的な成功談や失敗談の共有に至ったことが、SWYの事後活動において、自分や他者をどう助けるかという議論へ導いた。

この学校訪問は、教育コースのセッションでの学びを具体的に示した事例である。この学校訪問と振り返りによって、PYは自分の心の声を発することに対する自信を持つようになった。そして組織や社会、学校における自分たちの役割を理解し始めるようになった。

教育コースにとってのキーポイントは次の通りである。教育的リーダーは、人生や地球に起きる変化に適応しながら、人生を通じた学びを自分で指揮することができ、社会的立場に貢献し、全ての人々にとって安全な環境を作り出すことができる人である。

学校訪問の振り返りの時間における、PYのコメントには、以下のようなものがあった。「もし自分は目が見えず、知らない人が教室に入ってきて知らない言葉で質問されていたら、とても怖かったはずだ」「目の不自由な従兄弟と暮らしているが、彼が、特別扱いされたくないと言っていることについて改めて考えた」「がんを患う子供たちと接しているが、彼らは優しい手を差し延べられるのではなく、他の人と同様に扱われることを願っていることに気付いた」「今回訪問した学校の全ての子供たちがコンピュータを使えるように募金活動をしたい」「臓器提供者になりたい」「学習障害者の姉妹から毎日学びがある。教育コースのPYに対して言いたいことは、人にはそれぞれの学習方法があるということ。そして教育的リーダーにとって大切なことは、人に内在する才能や知恵を引き出すカギを見つけることが大切だということだ」

この振り返りは、SWYの世界的なネットワークがこれからの人生における冒険で、自分を信頼し支えてくれる関係性であることを皆が認識した瞬間であった。

一人一人の「蜘蛛の巣」が拡大し成長するということは、更に大きくより重なり合う網目があり、それを使っ

て学習方法を見付け人や情報に出会いその網をつなげていくということなのである。SWYは、更に拡大し続けるPYの蜘蛛の糸を發展させた。

コロンボにおける盲・ろう学校訪問の振り返りでは、教育コースのセッション全体を通して共有された様々な考え方や感情的な体験が引き出された。教育コースのPYは荒波や最も辛いディスカッションを乗り終え、支援と信頼が構築されたチームの関係の中で、レジリエンス、つまり苦境を乗り越えるしなやかな力を体得した。そして一人一人が共感力や好奇心、自信、勇気を持つ一個人として、そして国際的に活躍できる教育的リーダーへと成長した。

5. 参加青年の感想

黒川恵里子（日本）

教育コースでの時間は、新しい発見と出逢いであふれていました。

私は、コースをリードしていく委員の一人として参加しました。このような役割は初めての経験だったので、良いコースにしたいという熱意と共に不安もありました。自分自身が議論についていくのに精一杯だったことや、語学の面でスキルが足りずに悩んだこともありましたが、しかし、自分なりに貢献する方法を探し続けました。そして、何気ない時に仲間たちに積極的に声を掛け、話すことから始めました。すると、不安なこと等を話してくれるようになりました。私はそれを他の教育コース委員と共有し、皆の力を借りながら一緒にサポートしました。自分なりの方法で行動を起こすことで、変わっていくきっかけを作れることを実感しました。

教育コースの中で特に思い出に残っている瞬間が二つあります。

一つ目は、スリランカでコース別視察を行った後の反省会です。スリランカでは、盲学校とろう学校に行きました。そこには、障害を持ちながらも、一生懸命コミュニケーションを取ろうとする子供たちがいました。できることに目を向けて、目を輝かせながら新たなことに果敢に挑戦する姿が心に焼き付きました。子供たちが今を精一杯生きる姿を目の当たりにしたことで、その後の反省会では、ほぼ全員が感じたことや今までの経験などを心から語り始めました。涙ながらに話をしてくれた仲間もいました。それはみんなが心を開き、素直になった特別な瞬間でした。

二つ目は、コース・ディスカッションの成果を発表するサマリー・フォーラムです。当日の朝、私は教育コースの発表の最後にスピーチをする機会を得ました。突然のことで、コースでの学びをどうまとめるか迷いました。本番では、教育は人生そのものだと気付いたこと。人が皆、自分に素直になり、好奇心に従って生きられたら、世界はポジティブな運動であふれ、それは世界を変えることができる。人々が各々の好奇心に従える空間を作るという夢について話しました。発表が終わった後、仲間たちが目に涙を溜めて駆け寄ってきてハグをしてくれました。精一杯の想いを心から話したことで、何か伝わるものがあつたと感じ、感動しました。

教育コースで「自分らしさ」の大切さを学びました。そして、人々が好奇心に従って学びを楽しめる空間を創るといふ夢への一歩を踏み出す勇気をもらいました。たくさんの学びを社会や子供たちにつなげられるように努力します。

環境 コース

副題：SWYから持続可能な社会を！

ファシリテーター：星野雅範

参加青年：39名（JPY 20名、OPY 19名）

1. 目的とねらい

コースの目的

気候変動、土壌の劣化、放射能汚染等枚挙にいとまがないが、環境問題は私たち人類、そして地球上の生物たちが、これから永く存続していくことができるかを左右する、文字通り致命的な問題である。科学技術が進歩し、便利な生活を送ることができるようになった反面、その生活の代償として現れてきたものが環境問題であるともいえる。地球の環境、資源は、私たち世代で使い尽くしてよいものではない。しかし昨今多くの深刻な環境問題が報道される中、徐々に人々の意識は変わってきて

はいるものの、まだまだ一般的に環境意識は低く、「持続可能性」という概念でさえ、あまねく認知されているとはいえない状態である。

この問題は一地域、一國で解決できるものではなく、地球規模で手を取り合い、団結して取り組むべきものであり、世界中の志ある青年が集い、より良い未来について語り合う場である「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」はその意味で象徴的な意味を持つ。副題にある「！」には若者が知恵を出し合い、わくわくしながら本気で持続可能な社会を創造していこう、という強い意志を込めた。

PYがそれぞれの国の環境問題の現状を把握し、その解決策を「地球規模で考え、足元から行動する」の考えのもと、自らのライフスタイルや生き方そのものと、社会変革の両方に求め、持続可能な社会を目指し、具体的にアクションを起こしていくための場を創る。

コースのねらい

本コースでは、各国の代表的な環境問題の全体像を把握し、その原因と解決策について話し合う中で、環境問題の根本的原因と私たち一人一人のライフスタイルとがどのように関係するかを確認していく。また、コミュニティにおける伝統的生活文化を調べ、かつての人々の暮らしを持続可能性、精神的充足感という観点から検証する。それらを基に、地球の有限の資源をどのように未来世代と公平に分け合っていたらよいか、まず個人の生活に落とし込んで考えていく。更には実践例を通し、個人を超えて社会の変革へ向け、どのようにしたら社会にインパクトを与えていけるかについて議論を深め、問題解決能力を高めていく。そして持続可能な社会を創造していくための下船後の具体的な活動について叩き台を打ち立てる。各国のPYは事業終了後のメンバー間での協力体制についても議論する。

2. 事前課題

2-1. セッション全体に対する予習として、以下に掲げるそれぞれの環境問題に関する用語について、簡潔に説明できるように学習してくる。

気候変動 / 土壌劣化 / 食糧不足 / 持続可能な開発 / エコロジカルフットプリント / ESD (Education for Sustainable Development) / トランジションタウン / グローバリゼーション

トランジションタウンについては、以下の動画を参考にしてもよい。(セッション4と関連)

In Transition 2.0: a story of resilience and hope in extraordinary times

<https://www.youtube.com/watch?v=FFQFBmq7X84/>

2-2. 伝統的生活と現代的な生活におけるエネルギー消費を比較するため、それぞれのコミュニティ(コミュニティとは、自分が故郷と感じている場所があればその地域を、そのような対象がなければ現在住んでいる場所とする)において、電気、ガス、水道は何年くらい前に通ったか、またこれらが通る前、人々はどのような生活をしていたのかについて調べてくる。具体的には以下の項目について可能な範囲で情報収集する。

- ・照明
- ・調理とお風呂を沸かすためのエネルギー源
- ・水源
- ・住居における暑さ寒さへの対応
- ・食糧の調達
- ・衣類の調達
- ・住まいの材料の調達
- ・排泄物の処理
- ・主食の生産方法

各市町村の発行している市町村史、もしくは年長者等に取材することで調べ把握してくる。コミュニティに関する資料が見付からなければ、一般的な図鑑等から調べてもよい。(セッション3で使用)



3. 5回のセッションの概要

セッション 1: 地球の現状把握と未来世代に対する私たちの責任の確認	
目的とねらい	活動の内容
代表的環境問題について、その現状、原因、対策を把握する 各国における環境問題とそれに対する活動例を共有する 自分たちは未来へどんな地球を手渡していきたいかをイメージする	ファシリテーターから、気候変動等の環境問題の現状について話題提供。 各自の調べてきた環境問題とそれへの活動実践例を小グループ内で発表し、これらの中からいくつかを全体で発表し、共有する。 60年後の未来に暮らす自分たちの孫の世代になり切って、現代人に宛てた手紙を書く(現代人の行動がどのような結末を未来にもたらしているかを考えるワークショップ)。 自分の孫が自分の年齢になる頃へ向け、どんな地球を贈りたいかをイメージするワークショップを行う。

このセッションの主な学びと成果	
<p>最初にコースを円滑に進めるためのグラウンドルールの設定を行った。毎回コースメンバーで次回のセッションまで行うエコ活動を定める、などユニークなものもあった。</p> <p>事前課題として各自が調べてきた自国の環境問題とその対策について、小グループ内で互いに発表し合い、事例を学んだ。PYは他国の現状を本人から聞くことができ、実感を持って理解した。なお、全員の事例を聞くことは時間的にできないので、各自の事例を付箋に書いて摸造紙に貼り付け、興味のある事例を調べてきたPYに質問できるようにした。</p> <p>60年後の未来に住む孫(事前に名前や性格を考えてきてもらった)に対し、環境を切り口としてどのような世界を贈りたいか想像し、小グループ内で各自のイメージを共有した。</p> <p>その上で、60年後に理想とは逆に、各種の環境問題が悪化している状態を仮定し、そこに住む孫たちから私たちにに対するSOSの手紙を書いた。これによりPYたちはそのような未来も起こり得ること、そして決してそのようにしてはいけなことを再確認し、私たちの世代が真剣に環境問題に取り組んでいかなければならないと現実的にイメージすることができた。</p>	
セッション 2: グローバルvsローカル (食糧問題を切り口として)	
目的とねらい	活動の内容
<p>グローバル化、ローカル化の長所、短所を洗い出し、環境問題との関係を考える。</p> <p>特に、私たちが毎日口にする食糧の生産、流通、過不足とグローバル化の関係について理解を深める。</p>	<p>ファシリテーターから、グローバル化とローカル化の現状について講義を行い、それに基づき、小グループでグローバル化、ローカル化の長所、短所をブレインストーミングし、持続可能な社会の構築のためにはどちらが適するか、またはどのように両者をミックスすればよいかを議論する。</p> <p>食糧廃棄の現状に関する情報を共有し、グローバル化との関係について議論する。</p> <p>生産者、消費者、流通業者等のステークホルダー(利害関係者)の役に分かれて、食糧流通のグローバル化を実感するワークショップを行う。</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>食糧廃棄及びグローバルな食糧供給の流れの概要について動画を視聴し、世界では飢餓と肥満、大量の食糧廃棄が同時に起こっているという状況を理解した。そしてこの流れの中でどのような環境への負荷が発生するかを二人一組で議論し、その後全体に発表し、PY同士で考えを深めた。</p> <p>小グループに分かれ、食糧廃棄を減らす方法について議論を行い、全体で共有することで、様々な規模で取り組める改善策を学んだ。一定期間の断食を行うことで食への感謝の気持ちを育む、などユニークなものもあった。議論だけにとどまらず、コースメンバー内での活動目標として、「食事を残さないこと」に取り組むことにした。</p> <p>肉の消費と環境問題、飢餓問題との関係について掘り下げた。野菜や穀物に比べ、肉は生産過程で大量の水や飼料が必要となることや、肉の消費量が多い国がある一方で、飢餓に直面している国があることなどを理解した。</p> <p>ベジタリアンやペスカトリアン(野菜と魚介類しか食べない人)など、日常生活で肉を食べない青年が、なぜそのような選択をしているかを共有した。動物愛護、環境保護の視点から議論し、また栄養面、社会生活面で支障があるかどうかについても考える機会が得られた。</p> <p>半分以上のPYが、このセッションで扱った「食と環境問題」という視点について理解が不十分だったと回答し、環境問題の重要テーマの一つである食について、基礎知識を共有することができた。セッション冒頭で、東京の課題別視察先(国連世界食糧計画及び東京都廃棄物埋立処分場)で学んだことをペアになって振り返り、全体でシェアし、環境問題と、食物の生産、供給、流通について関連性を理解し、学びを深めることができた。</p>	
セッション 3: 足元を見つめ直す (各国の自給文化の理解と生活のエコ化)	
目的とねらい	活動の内容
<p>個人のライフスタイルと環境問題との関係を理解する。</p> <p>各地域の近代的ライフラインの普及以前の自給自足的な生活の情報を共有し、それぞれの文化的アイデンティティを確認するとともに、今後持続可能な社会の形を模索する上でのヒントとする。</p> <p>自身のライフスタイルのエコ化を検証し、個人として環境負荷の少ない生活を実践することを目指す。</p>	<p>ファシリテーターが実践しているエコ生活やエコ農業を紹介し、個人(家庭)のライフスタイルが、環境破壊とどのように関係するか情報提供する。</p> <p>参加各国における日々の生活やライフスタイルを比較し、エネルギー消費量の違いについて議論する。</p> <p>小グループで、事前課題を通して調べてきたそれぞれのコミュニティの近代化以前の生活を発表し合い、それらの中で特徴的なものを全体で共有する。</p> <p>小グループ内で、事前課題としてリストアップしたエコ生活の工夫及び今回新たに始めた三つの取り組みについて発表し、特徴的なものを全体で共有する。</p> <p>セッションでの学びを基に、下船後自分の生活をエコ化できる点があるかを考える。</p>

このセッションの主な学びと成果	
<p>化石燃料が導入される前の各国の伝統的ライフスタイルについて、事前課題で調べてきた内容を基に小グループで発表し合い、後に全体で気付いたことをシェアすることで、地域の気候条件等に適応した多様な暮らしがあったこと、これらはそれぞれの地域での将来の持続可能な暮らしを考える上での重要な知恵となることを学んだ。</p> <p>環境への負荷が少ない暮らしをしているPYに全体の前で暮らしについて発表してもらうことで、他の青年たちはライフスタイルの多様なモデルについて学んだ。</p> <p>小グループに分かれ、伝統と革新とを織り交ぜた理想的ライフスタイルについてディスカッションをすることで、今後目指していきべき各自の暮らし方についてヒントを得た。</p>	
セッション 4: 内から外へ～社会を持続可能な方向へ変革していくには	
目的とねらい	活動の内容
<p>前回のセッションで理解を深めた個人のローカル化、エコ化を進展させ、社会をどのように持続可能な方向へ変革できるかを具体化する。</p> <p>社会変革のための運動について実践例を取り上げ、見識を深める。</p>	<p>アドバイザーの榎本英剛先生によるトランジションタウン藤野及び世界のトランジションタウン活動の展開についての講義を聴く。</p> <p>小グループで理想のトランジションタウンを具体的にデザインし、構想を全体で共有する。</p> <p>セッション5のアクションプラン作りに向け、船での学びを最大化し、社会貢献につなげていくにはどうしたらよいかについてブレインストーミングを行う。</p> <p>前回理解を深めた個人のローカル化、エコ化を進展させ、社会をどのように持続可能な方向へ変革していったらよいかについて議論を行う。</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>前回の振り返りとともに、ファシリテーターの環境に配慮したライフスタイルを紹介した。PYは自分の生活と比較し、今後のライフスタイル変革の可能性を検討した。</p> <p>このセッションの前日に実施された榎本英剛先生によるアドバイザーセミナーで、環境に配慮した社会変革の取組としてトランジションタウンが紹介された。その内容を踏まえ、地元でトランジションタウン活動に関わっているJPYがその経験をシェアすることで、活動の具体的なイメージを得た。</p> <p>榎本先生をセッションに招き、トランジションタウン活動について質疑応答を行った。立ち上げ時の具体的なプロセスや、行政との関係について詳しく聞くことで、コンセプトだけでなく、活動の開始や維持に伴う苦労を理解することができた。</p> <p>榎本先生の指導の下、オープン・スペース・テクノロジーというワークショップを行った。オープン・スペース・テクノロジーは、参加者が興味やテーマに基づいて自由にグループを作り、またグループ間を自由に行き来し、情報交換の活性化や創造性を引き出す手法である。この手法を用い、PYの自発性を引き出し、実際に船内でどのようなトランジションタウン活動を実施したいか、もしくは展開できるかの意見を募った。船上でできる環境活動のレポートを作成し、六つのグループに分かれ、次年度以降も船で実践できるアイデアなどをまとめた。</p> <p>プロジェクトツリー(アイデアを可視化するブレインストーミング方法)や、「何を？」でなく「なぜ？」から考えるアプローチなど、これまでのアドバイザーセミナーで学んだ様々な議論の方法を実践した。その結果、ユニークなアイデアが多く生まれた。例えば、過剰な消費と廃棄をおさえるための物々交換においては、交換するモノにまつわる思い出も交換し、コミュニケーションを深め、単なる交換以上の付加価値を生み出す、など。</p>	
セッション 5: 振り返りとアクションプラン作り	
目的とねらい	活動の内容
<p>これまでの4回のセッションを振り返り、学びの総括をする。</p> <p>コースの学びを机上の空論にせず、帰国後、実際にどのような活動を行っていくか、できるだけ具体的なアクションプランを作成する。</p>	<p>PY同士で、セッション1～4の学びを振り返り、有意義だった点、印象的だったことを共有する。</p> <p>わくわくしながらSWYから持続可能な社会を創っていくにはどうしたらよいかを議論し、各自で下船後のアクションプランを作成する。その際、下船後すぐの目標と、将来的に実践したいことを明記する。また環境コースのメンバーが絆を保って活動していくための具体的方法についてアイデアを出す。</p> <p>セッションでの学びを机上の空論にせず、下船後実際にどのような活動を行っていくか、できるだけ具体的なアクションプランを各自で作成し、発表する。</p>

このセッションの主な学びと成果

セッション4までと課題別視察のそれぞれについて、何を学んできたかを振り返り、学びの全体的な流れを確認した。PYたちが企画した船内でのトランジションタウン活動について、グループごとに進捗を報告した。PYたちが宿題として考えてきた下船後1か月以内、1年以内、10年以内に行う環境問題に対する取組について、リーダーシップ・セミナーで学んだコーチングの手法を用いて二人一組で掘り下げ、実現へのステップを確認した。取組案は全員にとって有益な環境コースの財産となったので、後に内容を印刷して全員で共有した。

下船後環境コースのメンバーとしてどう連携を取っていくかについて小グループで議論し、全体でシェアした。フェイスブックのグループページを作り、前述の下船後の取組をビデオで投稿する、それぞれが植樹をする、スリランカPYが、同国施設訪問先のアーユルヴェーダ研究所でみんなで植樹した木の成長の様子を定期的に投稿する、など具体的な案が生まれた。

セッション1で小グループごとに作成した60年後の孫からのSOSの手紙に対し、そのときのグループに戻って、今度は孫たちに返事を書いた。現代社会における自分たちの行動が、孫たちの未来にどう影響を与えるかを意識しながら、責任を持って行動していくことを誓った。

最後に円になって座り、先ほど話し合った各個人が10年以内に行う取組を一人一人宣言し合った。そして立ち上がり環境コースのテーマソングをPYのギター演奏に乗せて肩を組んで全員で合唱した。これまで歌詞は“ We can do it together ! ”(一緒にならきっとできる) だったが、PYのアイデアで、決意を込めて “ We will do it together!! ”(一緒にやる)に替え、繰り返し歌った。一体感の中で、下船後もこのつながりを保ちながら、わくわくしながら持続可能な社会を創っていくと決意新たに、セッションを締めくくった。

4. ファシリテーターのコメント

本コースの目的は、表題にあるようにSWYから持続可能な社会を創造していくことであり、その熱意を形にするため、身近なPY同士、お互いから学ぶということを重視した。11か国から意識の高い青年たちが集まっているという利点をいかし、全体を通して各青年が持っている知識、経験、背景を題材とし、皆で共有することを心掛けた。セッション1では各青年が自国から持ち寄った環境課題を発表し合ったが、これらは本やインターネットからの情報とは違い、目の前にいる同世代の青年から得られる実体験として、興味や共感を持って学ぶことができた。例えば、チリの銅山で鉱物残渣により深刻な環境破壊が起きているという発表があったが、銅は近代的生活の中で欠かすことのできない金属であり、知らず知らずのうちに自分たちの生活が他国での環境破壊に結び付いていることを実感した。またインドやタンザニアの青年からは、気候変動の影響と思われる降雨不足により作物の生育が悪くなったり、ひどいときには家畜が死んだりしたという報告があった。気候変動は一人一人の日々の活動が複雑に交わった結果だということを踏まえ、一つの惑星の上に暮らしている私たちは、国を超えて加害者になっている可能性があることを改めて実感した。

食糧問題を取り扱ったセッションでは、ペスカトリアンやベジタリアンのPYにそれぞれの倫理観や環境に対する思想と、食生活のつながりについて話してもらった。また、事前課題として調べてきてもらった各国、各地の伝統的生活の知恵を紹介した。こうしたPY同士の情報交換やアイデアの紹介は、環境問題を解決するためのこれからのライフスタイルを考察する上で非常に有意義なブレインストーミングの機会となった。

訪問国活動においては、インド、スリランカのPYの積極的な発言が、コースの学びに大きく貢献してくれた。例えば両国では道路、町中に非常に緑が多いように

見える、という意見に対し、インドやスリランカのPYは、自然を敬う気持ちが国民意識に根付いていることや、宗教上、樹木を大切にしていることについて説明をした。また、スリランカでアーユルヴェーダ研究所を訪問したが、実際にインドPYは自宅でアーユルヴェーダによる治療を実践している、など具体的な話を聞くことができ、訪問国活動で見聞きした内容を補完することができた。

環境活動へのモチベーションを高める取組については、いくつかの工夫をした。セッション4では、個人のライフスタイルを超えて地域から行動を起こしていくトランジションタウンについて学び、その疑似体験として実際に船上でできる環境活動について具体策に考えた。食糧廃棄量削減の動画を作成して全PYに向けて上映会をするなど、実際にいくつかのグループはアイデアを実践に移すことができた。

最初のセッションにおいて、60年後の未来に住む孫たちから受け取った、環境破壊が進んだ世界からのSOSの手紙に対し、最終セッションでは、これまでの学びを踏まえて、自分たちが行動を起こし、未来を変えるという約束の手紙を書くワークショップを実施した。悲劇的な結末を思い描いた未来のイメージと、そのシナリオを変えるための行動宣言は、きっと青年たちのこれからの活動において、背中を押してくれる体験になると考える。この手紙に限らず、セッション全体を通して、自分たちの世代だけに捉われない、長期的な視野をもった学習を重要視した。例えば、PYからは、化石燃料到来以前の環境負荷の少ない暮らしについて調べてくるという事前課題を通して、親、祖父母に昔の生活の様子を聞く機会を得られて良かったという声を聞いた。今後ともこれを機会に更に先人から学んでくれることを願う。

その他にも、アーユルヴェーダ研究所で、各国からの代表がキャンドルに火を灯した点火式や、同所における

全員での植樹体験、そして最終セッションで考えた下船後におけるコースでのつながりを維持する計画、輪になって座り、宣言し合った将来の環境行動目標など、環境コースは象徴的な場面に多く恵まれた。全員でのテーマソング合唱による一体感の醸造も、印象深い。これらは、環境コース共有の重要無形文化財といえるものであり、将来青年たちがきっと直面するであろう困難を乗り越え、わくわくしながら、持続可能で孫たちに誇れる未来を創っていく原動力になると信じる。

5. 参加青年の感想

ダリア・ブチャコバ (ロシア)

モハメド・マフムード (バーレーン)

現代社会で環境問題が多く議論される機会があることを知ってはいたものの、環境問題がその他の地球規模課題につながっていることに、私たちは気付いていませんでした。コースを通して、私たち人間が日々のライフスタイルを見つめ直し、それを改めなければ、地球が近い

将来、人や動物が住めない惑星になるということ、改めて認識しました。環境コースのディスカッションを通して、異なる地域の課題に目を向け、解決策を思案する中で、私たちは、先人たちの伝統的なライフスタイルから環境負荷の少ない暮らしの知恵と工夫を学び、新しい科学技術による可能性を追求することが必要だという結論にたどり着きました。コースの中で、トランジションタウン運動を紹介された時、ある団体の行動が、大きな変化を与えることができるということを学びました。また、PY同士が自身の取組を紹介し合うことで、個人が地域課題の解決にどのように貢献できるのかをお互いから学ぶことができました。理論学習だけにとどまらず、日本、インド、スリランカでの課題別視察を通じて、異なる環境問題に対して、どのような取組が行われている現場を見学することができました。コースの最後に、培ったネットワークをいかにしながら環境問題への取組を続けるために、帰国後に各自が取り組める事後活動を計画することができたことが大きな収穫となりました。

情報・メディアコース

副題：情報を冷静に見極め、効果的に発信する

ファシリテーター：清水御冬

参加青年：38名（JPY 21名、OPY 17名）

1. 目的とねらい

コースの目的

インターネット、特にソーシャルメディアの爆発的な発達によって、今や誰もが情報の発信者となり 受信者となる時代。若者たちは常にスマートフォンにくぎ付けでまるで情報依存症のようである。しかしそんな彼らは玉石混濁の情報に振り回されることも多々あるように見える。情報というものがどのように生まれ、加工され、どういう意図や背景の中で発信されているか、いわゆるメディア・リテラシー に関する知識が不足しているためだ。将来リーダーとなる若者たちにとってメディア受信力・発信力を付けることは必須である。本コースを通じ、PYは情報を見極める力と効果的に発信する力を身につけ、社会貢献のためにメディアを活用できるようになる。

コースのねらい

本コースでは、事前課題で作成したメディアやプレゼンテーション資料を題材に、ディスカッションを行い、メディアの問題点や性質について理解を深める。さらに、メディア制作のワークショップを行うことによって異文化交流を深めながら情報の効果的な発信方法を学

ぶ。また、各国のメディアの問題点を知ることにより、メディアと社会の関係を理解する。PYは本コースで学ぶことによって、情報やメディアに対して客観的な視点を持つことができるようになり、情報に流されることなく、自分で調べ、考え、行動できるようになる。

2. 事前課題（三つの中からどれか一つを選ぶ）

- 何か自分が「個人的に知っていて周りに伝えたい情報」や「個人的に感じていること、考えていること、訴えたいこと」などを伝えるメディア(記事、映像、ポスター、CM、写真集、パワポなど形式自由)を作成し、3分でプレゼンテーションできるようにする。
- 自国において、今一番気になっている「情報やメディアをめぐる問題」あるいは「不正確で偏った情報やメディアによって引き起こされた問題」などについて、3分でプレゼンテーションできるように準備する。(形式自由、パワーポイント推奨)
- 自分が関わった SNS などを活用したソーシャルメディアによる社会貢献の事例(クラウドファンディングなど)について3分でプレゼンテーションできるように準備する。(形式自由)

3. 5回のセッションの概要

セッション 1: ソーシャルメディアを活用した社会貢献の事例を知る	
目的とねらい	活動の内容
<p>コース概要を理解する 事前課題をプレゼンし、互いに親睦を深める Ex-PYのメディアを使用した社会貢献の事例を学ぶ</p>	<p>ファシリテーターによる、コースの全体像、目的、ゴールの説明 事前課題発表: 3分間のプレゼンテーションと、その内容について小グループでディスカッション Ex-PYによるゲスト講演: 東日本大震災の被災地における仮設住宅利用者を対象とした新聞制作について メキシコPYによる、国内で行方不明になっている43人の学生についてのプレゼンテーション: メディアの真実と、政府と民間組織の役割についてのディスカッション</p>
このセッションにおける主な学びと成果	
<p>小グループでのディスカッションを通じてお互いがどのような社会問題に興味があるのかを知り、その上で、意見を出し合い、プレゼンテーションのテーマを精練した 各国のメディアには、異なる特徴があり、また視聴者も、国や文化によってメディアに対する信頼度や姿勢に大きな違いがあることを学んだ 自国で知り得るニュースには偏りがあり、その国や地域で重要視されている事件が、必ずしも世界共通ではないことを理解した。</p>	
セッション 2: 国による情報・メディアの問題を理解する	
目的とねらい	活動の内容
<p>各国のメディアが直面する問題を理解する SNSの登場による可能性と新しい課題について議論し、未来のメディアの在り方を探る</p>	<p>事前課題の発表: 各国のSNSにまつわる社会問題に関してプレゼンテーション 小グループディスカッション: SNSの光と影(優れた点と今後の課題)とは 小グループディスカッション: 間違った情報と正しい情報を判別するにはどのような考え方、取組が必要か</p>
このセッションにおける主な学びと成果	
<p>普段自身がどのようにSNSを活用しているかを振り返り、有意義な活用の仕方、利用において気を付けるべき点などを学んだ。 インターネットに氾濫する、大量かつ不確かな情報の中から、事実を見分けるためのアイデアについて心掛けていること、取り組んでいることをお互いから学んだ。その結果、100% 真実であるものはほとんど存在しないことや、信ぴょう性を確かめるためには、情報源を探る必要があることなどを学んだ。 SNSにおいて、ビジネスを目的とした内容と、コミュニティで作られる交流のための内容には、異なる意図が働いていることを理解した。その内容から、情報の真偽を確かめるためには、その情報が提供されている目的を見極めることが重要であることを学んだ。</p>	
セッション 3: メディアが社会文化の鏡であることを知る	
目的とねらい	活動の内容
<p>メディアが意図的、あるいは無意識に表現する文化の違いから、異文化理解について理解を深める 曖昧な概念を表現するために、メディアがどのような役割を果たすかを理解する</p>	<p>ビデオを使った事前課題の発表: 関心に基づいて制作された動画もしくはスライドショー アドバイザーのマイク・マツノ先生による講義: 文化と社会の関係をメディアがどのように描写し、反映しているかを、いくつかの映画を題材に解説 文化の違いから生まれる、メディアの問題についてディスカッション</p>
このセッションにおける主な学びと成果	
<p>映画を通じて、社会、経済、政党の対立など、どのようにメディアがその社会の動きを表現しているか学んだ。 国によって理解や表現の仕方が異なるテーマ(例えば「愛」「豊かさ」など)について、メディアがどのような方法を用いて描写しているかを共有した。また、その方法によって正しい理解が促進されているか、誤解や情報の不足が生じていないかどうかを考察した。 説明が難しい概念の一つとして扱った「愛」をテーマに、様々なPYに取材を行うメディアプロジェクト、“What is love?”が立ち上がった。 アフリカの国々に関する日本メディアの報道は情報が乏しく、また、国際的なニュースに関して、日本のメディアは報道規模がかなり小さいということを理解した。メディアが取り上げる情報の範囲や強調する点によって、その地域の文化や社会情勢について正しく理解できない可能性があるということを学んだ。</p>	

セッション 4:メディア・リテラシーを身に付ける	
目的とねらい	活動の内容
メディア・リテラシーとは何か、身に付けるためには何が必要かを理解する メディアと政府の関係について理解を深める	グループディスカッションと発表: 若者がSNSを利用する際に、どのように情報を選び、発信し、表現をしているかを検証し、どのような点に気を付けなければならないか ディスカッション: SNSにおける「オーバーシェアリング(情報を過剰に共有すること)」の問題と、若者の無責任なSNS利用(例えばツイッターの不適切な発信によるプライバシーの侵害など)について 講義: ファシリテーターが過去に制作したドキュメンタリーを紹介し、作品のメッセージや、そのメッセージを伝える工夫についてプレゼンテーション
このセッションにおける主な学びと成果	
無責任なSNSの利用に伴う社会問題について学んだ。若者にとってSNSは身近な道具となったが、技術の発展に伴い、SNSを利用する若者も、それに伴い、責任やルールを学ぶ必要があるということを確認した。 各参加国の報道の特性や、プロパガンダ(情報の悪用による扇動)の定義、政府が報道に対してどのくらいの影響力を持つかなどの議論を通じて、国による報道の自由の違いを学んだ。 メディアが社会を反映しており、日本の視聴率偏重型の番組制作のように、視聴者やスポンサーのニーズが大きな影響を持っていることを理解した。	
セッション 5:メディアの使命と社会貢献の可能性	
目的とねらい	活動の内容
作成したメディアについてPY同士でフィードバックし、今後、どのようにメディアを活用した社会貢献ができるかを考える コースで制作したメディアについて振り返り、学んだことを整理する	コースで制作を終えたメディアをグループごとに発表 それぞれの制作物の良い点と改善点について意見交換 低所得者層が暮らす地域の支援を促すことを目的に作成されたメディアをバーレーンの青年が発表し、それを題材に、メディアを利用した社会貢献の可能性についてディスカッションする ファシリテーターによる総括
このセッションにおける主な学びと成果	
各グループで完成したメディアを披露し、制作物の良い点と改善点について議論した。メディアを正しく活用するために培った知識と技術を実践する機会となり、また与えられたフィードバックからは、今後の更なる課題について理解することができた。 バーレーンのPYによる恵まれない家族のための家の再建プロジェクトについてプレゼンテーションを聞き、メディアを使った社会貢献の具体例から、自国の社会課題の解決のためには、メディアはどのような役割を果たせるか議論した。	

4. ファシリテーターのコメント

情報・メディアコースでは、情報の冷静な見極めと、効果的な発信について議論した。前者に関しては、事前課題として各PYが選んだメディアを題材とし、それぞれの内容について議論し、後者については、実際の動画制作というワークショップで訓練を行った。

コースにおいて、PYがお互いから刺激を受け、学び、成長する、ということをもっと重視した。そのためコースでもPYによる事前課題の発表を軸に構成したが、これは同時に普段英語でプレゼンテーションをすることの少ないJPYが、多種多様な聞き手を意識しながら自身の意見を英語で伝えるというコミュニケーションの訓練も兼ねた。コースを運営する上で課題となったことは、事前課題の提出の時点で既に知識や語学力に差が表れていたこと、また全員がコースの中で課題を発表するとなると、かなりの時間を消費してしまうことである。一方で、優れたプレゼンテーションも多く存在し、PYがアイデアや感動を共有し、お互いを刺激し合うとい

う目的は達成されたと感じている。

コースの後半、PYがグループで行うメディア制作については、アドバイザーの榎本英剛先生の力を借りて、オープン・スペース・テクノロジーという手法を使ったことで、PYが興味・関心に基づいてグループを編成し、また自由にテーマ設定を行うことができた。このように、主体性を最大限に引き出すことで、PYが生き生きと課題に取り組めるように配慮した。その成果は、PYたちがリーダーシップを発揮し、国や文化の違いを超えてコース・ディスカッション以外の時間に夢中に制作に取り組む姿に表れていた。自主性を尊重し、主体性を引き出したことで、一人一人の秘められた可能性を垣間見ることができたように思うと同時に、早い段階でこのような手法を取り入れればよかった、と思った。

ファシリテーターとして悩んだ点は、PYのメディア制作の過程において、どのくらい制作物に対するアドバイスをを行うか、という点であった。制作は極力PYに任せ、口を出さないようにしていたが、作品のクオリティ

を上げるためにどうすればいいか、ということ学ぶことも目標とするならば、結果的にはもっと制作途中でアドバイスをすべきだったと感じた。どのタイミングでどれくらいのアドバイスをすべきかの判断は非常に困難だった。PYが制作した作品を、より多くの目に触れさせるために、制作作品を船内の上映会という形で他のコースのPYにも見てもらったことは、視聴者の反応を直接確かめることができ、客観的なフィードバックを得ることができたという意味で、PYにとって大きな収穫となった。制作したメディアを通して、自分たちが発信したかったメッセージが伝わっているのかどうかを確かめる機会を得ることができた。

コースを振り返り、ファシリテーターとしての反省の一つは、講義が少なかったことである。PYの発表の時間やディスカッションの機会を最大限確保し、私が講義をしたり、自身の見解について話す時間は最小限に抑えた。しかし、メディアを取り巻く問題の論点の明確化や、PYのディスカッションに対する、ファシリテーターの私見を共有するという機会をもう少し増やすべきだったと思う。また、意見が真っ二つに割れる、白熱したディベートをする機会が持てなかったことも心残りである。PYの建設的な議論に適した議題設定をすることも、ファシリテーターの重要な役割だと認識している。ファシリテーターが投げかける問いを吟味し、精査することが、優れたディベートの鍵となるが、今回は時間的な制約から、準備はしていたものの、ディベートの実施には至らなかった。

コース・ディスカッションは、ファシリテーターである私自身にとっても、非常に学びが多く、また楽しい時間となった。コースのお陰で、楽しみながら有意義な学びが得られたというPYの声も、純粋に嬉しく受け止めている。何かを学ぶ際に、「楽しい」という感覚はとても大切である。今回とても恵まれていたと感じる点は、多くの人がこのコースの運営に協力してくれたことが挙げられる。陸上研修中には、東日本大震災後、宮城県石巻市の仮設住宅の住民を対象とした新聞制作に従事しているex-PYに講義してもらったり、課題別視察で訪問したフジテレビでは、現職の番組制作スタッフから話を伺うことができた。船上研修においては、アドバイザーに講義やワークショップの一部を担ってもらい、また訪問国であるインド、スリランカにおいても、テレビ番組や映画制作の第一線で活躍する方々のお話を聞くことができた。PY同様、私自身が、このプログラムから多くのことを学ぶことができた。この場を借りて、感謝を申し上げたい。ありがとうございました。

.....

5. 参加青年の感想

石丸僚子（日本）

情報・メディアコースでは、コース名のとおり、主に

メディアに関わるディスカッションと制作をしました。

まず、ディスカッションではメディアについて各国の違いや共通点をディスカッションで共有しました。各国それぞれにメディアに対する捉え方がある中で、全ての意見に共通していたことがありました。それは、「報道が真実だと信じ、疑わないことは、非常に危険なことである」ということです。どんな報道でも、それを作っているのは人間であり、その人の立場によって解釈が偏ったり、表現方法が変わったりしてしまうことは、ある程度、仕方のないことだと言えます。しかし、だからこそ、情報の受け手となる視聴者側に、メディア・リテラシーが必要不可欠なのだという認識を共有することができました。また、PYの中には、ニュースキャスターがいたり、ジャーナリストがいたり、必ずしもメディアの受け手だけが集まっていたわけではありませんでした。作り手と受け手、双方の意見が飛び交い、コース中は常に活発な議論が交わされていました。

次に、船上研修の終盤になり、実際にメディア制作をすることになりました。好きなものを表現していいという自由なテーマでした。みんなの声や各国の楽器を集めて音楽を作る青年もいれば、「愛とは何か」という内容のインタビューをし、一つの動画に仕上げたPYもいました。また、デジタルなものではなく、たくさんの青年たちから集めた「平和とは一言でいうと何か」についての紙を、一つのポスターにまとめた人もいます。それぞれのアイデアや技術が、良い個性として形になり、みんなと共有するというのはとても面白いものでした。

他にも、訪問国活動では、インドでもスリランカでも貴重な経験をしました。ここではインドの経験を述べることにします。私たちのコースは、アジア最大の映画編集のスタジオを訪問し、編集室などの現場を実際に見学するという貴重な経験をしました。また、講義ではインド映画の歴史なども深め、時代とともに変わっていく人や情勢に合わせて、映画の流行りも変わっていくことを学びました。また、現地の学生と共に、現地の学生が作った映画を見たり、インドで作られた映像を見たりした後に、言語は分からなくとも映像の効果やカメラのアングルから訴えたいことは何かを考察するということもしました。どこに目を付けて映像を見るか、ということに普段意識していなかったもので、これからは様々な視点から考察する力も身に付けたいと思いました。

最後に、情報・メディアコースでは、自分の考えは何か、ということに常に考えさせられた場であったと強く思います。メディアが発している情報が、必ずしも正しくないときに大切になってくることは、やはり自分の思っていることや考えをしっかりと持つことです。その力を養い、更にPY同士で高め合った、とても有意義なコースでした。

青年起業コース

副題：「起業」で社会を変える

ファシリテーター：安藤美冬

参加青年：38名（JPY 19名、OPY 19名）

1. 目的とねらい

コースの目的

「起業」を指す範囲は広い。かのスティーブ・ジョブズや松下幸之助のような何万という社員を率い、世界を変えるような「起業」もあれば、貧困や環境問題を解決する目的で設立された営利目的でないNPO団体や、社会の問題を、事業により解決していくための社会起業もある。そもそも起業率の高い国は、各種税制が優遇されるシンガポールや社会保障が手厚い北欧諸国以上に発展途上国によく見られる。安定的な雇用や企業が少ないゆえに、スモールビジネスが盛んだからだ。会社員など組織で働く人間が8割を占める日本でも、最近ではフリーランスが増加、本業の傍らで「二足のわらじ」を履くパラレルキャリア実践者も出現し始めている。

「2011年度に小学校に入学した子供の65%は、今存在していない仕事に就くだろう」(米デューク大学の研究者)

つまり「起業」とはもはや、一部のアイデアや才能のある人間だけに縁があるものではない。特に若者にとって、この時代を生き抜くための必須なスキルなのである。そして青年たちが起業にチャレンジすることで生まれる社会貢献は計り知れない。雇用の創出、スキルの訓練、クリエイティブな生き方、何より生きがいを追求することにもつながっていく。

本コースでは、自国で営利、非営利問わず「起業」を通じて社会貢献を行う人材として活躍することを目指す。

コースのねらい

講義やディスカッションを通じて、以下の四つの要素を中心に探求し、実践する。

起業にまつわる基礎的な知識（起業とは・起業に必要な要素・起業のメリットとデメリット）

マインドセット（起業家に必要とされるリーダーシップ、ビジョンなど）

ビジネスモデル（継続的に収益を得ながら社会に貢献し続ける仕組みの作り方）

クリエイティビティ（着眼点の養い方、時流の読み方など）

これらの四つの要素を探求し、事業終了後、自国に帰った時に、起業を通じて社会の課題を解決できるようになる。また、起業家を目指すかどうかにかかわらず、コースのプロセスを通じて学ぶ「マインドセット」「クリエイティビティ」などどのような分野でも求められるスキルを持ち帰り、それぞれの活動分野でいかせるようになる。

2. 事前課題

2-1. プレゼンテーション準備

自国の代表的、あるいは最新の起業事例の一つを選び、以下の要素を必ず入れて3分間のプレゼンテーション準備すること。プレゼンテーション資料（パワーポイント推奨）をコースのメーリングリストに提出する。この事前課題はセッション2で使用する。

プレゼンテーションに盛り込む内容

氏名、出身国名

紹介する起業事例の概要

CEO、社長の経歴、人物紹介

事業の画期的なポイント

事業が実践している社会貢献

2-2. コースで扱う起業の概念について、理解を深めるための参考文献

購入あるいは閲覧できる環境にある者のみで可。なお、『The Shift』については、JPYはJPYのみへの課題ですすでに日本語版の読書を課されているため、読まなくてもよい。

『Bold: How to Go Big, Create Wealth and Impact the World』 Peter H. Diamandis and Steven Kotler著

『The Shift: The future of work is already here』 Lynda Gratton著

3. 5回のセッションの概要

セッション1: 起業を通じた社会貢献とは	
目的とねらい	活動の内容
<p>自己紹介と目標共有 起業についての基礎的知識を得る 事例を分析し、起業の意義や社会的な役割について考察する</p>	<p>ファシリテーターの紹介と自身の起業概要の紹介 コースにおけるPYの目標の発表、共有 ファシリテーターによる自身の起業内容を紹介 マイクロ起業、社内起業、社会起業など最新のトレンドを交えた起業事例紹介 セッション5のビジネスプランコンテストの概要説明 小グループに分かれ、「起業を通じてどう社会に貢献できるか」をテーマにブレインストーミングを行う</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>各国の起業の事情を共有することによって、起業が持つ社会的な役割や可能性について理解するとともに、国や地域ごとに、起業に対する社会的な評価や役割が異なることを学んだ。 起業に必要な資源についてブレインストーミングをし、モデルケースを分析することで、社会的に起業がしやすい国、困難な国があることを理解した。例えば、日本の場合、学生にとっては卒業後、既存の会社に就職することが主流な進路であり、起業という選択肢が必ずしも一般的ではないことを理解した。一方で、出身地域では資金調達や団体設立などが比較的難しくなく、誰でも起業しやすい環境があると主張するPYからは、マイクロ起業について具体例が紹介され、まずは起業を取り巻く各国の社会事情を垣間見ることができた。 異なる起業のモデルから共通点を探り、「既に存在するものに更なる価値を付加すること」「創造力を応用すること」といったように、起業家に必要な精神とは何かを定義し、起業の概念について理解を深めた。</p>	
セッション2: 各国青年による自国の起業事例紹介	
目的とねらい	活動の内容
<p>異なる事例を分析し、成功する起業に不可欠な要素を洗い出す PYが紹介する起業の事例から、それらの起業が必要とされる背景や社会事情を理解する 起業が社会問題の解決にどのように貢献しているか、具体例から理解する</p>	<p>PYによる自国の起業事例を発表する(事前課題の発表) PYが紹介する起業事例から、優れたアイデアや成功している起業にはどのような共通点が見られるかを議論する。 小グループに分かれ、「起業するために必要なモノ、人、事」を議論する(議論の結果を模造紙にまとめる。セッション3で使用)</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>様々な起業の事例を理解することで、起業の目的や社会に与える影響が多様であり、特定の決まりごとがあるわけではないことを学んだ。 「起業するために必要なモノ、人、事」をテーマとした議論では、一見共類似点がないように見えるいくつかの起業の事例の中から、共通する人的資源や社会環境などを見出すことができた。例えば、事業規模が大きく異なるモデルの中にも、優れたアイデアマンがいたり、起業を後押しする社会的要因が共通に存在することなどを発見した。</p>	
セッション3: 起業に必要なステップの整理/ブルーオーシャンの見付け方	
目的とねらい	活動の内容
<p>起業するための具体的な流れを理解する アイディアを磨き、ブルーオーシャン(競合の少ない、あるいはまだ発見されていない、チャレンジする価値のある領域のこと)を見付けるためのスキルを身に付ける</p>	<p>前回の課題である「起業するために必要なモノ、人、事」を模造紙にまとめ、グループごとに発表する。発表で出た要素を更に「お金」「アイデア」「人脈」「専門知識」「職業経験」「法整備」「メンタル面でのケア」など細かなカテゴリに分けて整理する。 既に起業経験があるOPYから、起業に至る動機や今後の展望について話を聞く ワークショップ: 優れたアイデアを事業へと発展させる方法と「ブルーオーシャン」の見付け方</p>

このセッションの主な学びと成果	
<p>起業に必要なプロセスを議論する中で、行政や地域社会による、起業に対するサポートシステムが国によって大きく異なることを発見した。各国政府の若い世代に対する起業への支援状況を共有した。OPYからは、国の基幹産業に関わる起業に対しては、行政から資金や団体設立のためのサポートが得られる事例などが紹介された。</p> <p>既に起業経験があるPY2名が、自身のビジネスについて紹介した。起業する際に抱えていた不安や、事業主として常に抱えているリスクへの精神的な負担など、理論的なことだけでなく、起業した人の心境について共感することができた。</p> <p>ブルーオーシャンに関するディスカッションでは、成功している起業モデルに見られる共通点として、未開拓の市場や、認知度の低い需要、既存の技術の新たな活用方法など、まだ発見されていない物事に着目することが挙げられた。</p>	
セッション4: 事例から学ぶ優れた起業	
目的とねらい	活動の内容
<p>起業の一連の流れを疑似体験し、アイデアがビジネスとして成立するための要素が何かを理解する</p> <p>セッション5で実施するビジネスプランコンテストの準備をする</p>	<p>映像を鑑賞しながら、起業が社会問題を解決した事例や、優れた起業家のマインドセットを学ぶ</p> <p>OPYとJPY2~3名ずつで構成される小グループに分かれ、「日本社会を舞台に起業する」ことを想定してビジネスの立ち上げから実施までのプランを作る(セッション5で発表)</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>JPYの多くが学生であり、「自らがビジネスを起こす」ということに馴染みがないため、起業の一連の流れを想像することが困難だった。そこで、小グループに分かれる際に、起業経験や社会人経験を持つOPYをバランスよく各グループに配置し、ビジネスプランを作るための議論をリードしてもらった。また、「日本を舞台に起業する」という設定にしたことで、JPYは、日本の社会事情や近年のブーム、満たされていない社会的需要などを積極的に共有した。両者が情報やスキルを補い合うことで、実践的なビジネスプランに取り組むことができた。</p> <p>ビジネスプランを作成する過程において、日本の社会課題や起業を取り巻く事情について理解を深めることができた。また、主にOPYからは、実体験を基に、起業する際に入念に議論すべき点などが共有された。例えば、ビジネスを立ち上げることよりも、それを軌道に乗せて、安定した収入を継続的に得るための戦略が非常に重要であることなど、実践的な視点を得ることができた。</p>	
セッション 5: ビジネスプラン発表と振り返り	
目的とねらい	活動の内容
<p>ビジネスプランの発表から、自身が取り組める起業のアイデアを学ぶ</p> <p>コースの学びの振り返り</p> <p>事業終了後のアクションプランの策定</p>	<p>セッション4で小グループによるビジネスプランを発表する。アドバイザーのマイク・マツノ先生にコメントを依頼し、各発表に対して質問や評価をしてもらう</p> <p>発表しているグループ以外のPYは、発表されたビジネスプランの強み、弱みを書き出し、それぞれのプランをより実現可能で有意義なものにするためには何が必要かを考える</p> <p>発表後、全員で投票を行い、最も魅力的で内容が優れていたビジネスプランを選出する</p> <p>それぞれのプランの優れた点、改善の余地のある点をおさらいし、5回のセッションで学んだことと併せて、一人一人が帰国後にどのような活動に取り組めるかを議論する</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>ビジネスプランの発表を通して、ビジネスの内容を組み立てるだけでなく、いかにその内容を魅力的に他者に伝えるかが重要であることを学んだ。資金を集めたり宣伝したりする際には、アピールの仕方がビジネスの結果を大きく左右することを理解した。</p> <p>観光に着目したグループ、ITの活用を模索したグループなど、現代の日本を舞台にしたユニークなアイデアが多く発表され、いずれも実現可能なプランが多く提案された。それに加え、発表したビジネスプランに足りないものを、ファシリテーターやアドバイザー、他のグループのPYから指摘してもらうことで、実践的なブレインストーミングとなった。</p> <p>5回のセッションを振り返り、自身の興味・関心や、アイデアと向き合い、それがどのようなビジネスになり得るか、さらに、どんな社会的需要に応えることができるのかということを考えることができた。</p>	

4. ファシリテーターのコメント

「社会をより良い場所にするための起業」というテーマの基、青年起業コースはスタートしたが、私の本当の思いはそれだけに留まらない。起業は新しいマーケットを作り出し、雇用を生み、社会をより住みやすい場所に変えることは間違いない。けれど、起業はそもそも個人を幸せにする手段でもある。一人一人が、ワクワクするようなアイデアを実現させていく過程で、自分の人生に深い充足感を感じられること。これこそが、起業という人生最高のチャレンジがもたらす効用だと思う。現代は、仕事に悩む大人にあふれている。先進国の多くが「住む場所、就く仕事の自由」を認めているにもかかわらず、一説によると9割もの人が住みたい場所にも住んでおらず、やりたい仕事に就いていない。

仕事に悩むのは大人だけではない。学生も、一生涯働ける会社に巡り合えるかどうか、あるいは自分の才能を投じる価値のある仕事に出会えるか、不安に思う者が多いのではないか。ある大学の研究によると、社会の65%もの人が、およそ10年後には、今はまだ存在していない仕事に就くと予想している。世間を賑わすドローンや自動運転の実用化、昨年日本の長崎にオープンしたロボットがホテルスタッフを担うホテルなど、未来の仕事の様相は少しずつ変わってきている。仕事の入替わりが激しい現代だからこそ、誰でも起業にチャレンジできる世の中を創りたいと思う。特別な才能やアイデアがなくても、起業を人生の選択肢として捉える人が増えたら、この世の中はどんなに面白くなるだろうかと思う。そんな思いを持って、モチベーション、クリエイティビティ、ビジネスプラン、社会貢献的視点など、起業する際に大事にしたいポイントをこのコースでは盛り込んだ。

そんな大きなビジョンを掲げてみたものの、初めてのファシリテーション、初めての英語の仕事。たくさんの「初めて」の中で、ファシリテーターの私自身が戸惑い悩みながらの日々だった。5回のセッションの間、どれ程PYたちの成長ぶりに感動したか分からない。日本を含む世界11か国から集まってきた彼らは、真のチャレンジャーだった。道端でキャンディーの売り子をして1万ドル以上を稼いだメキシコの青年、母国で起業し、失敗を乗り越えた24歳のUAEの青年。大学生ながら、あるビジネスプランコンテストで優勝した経験を持つ日本人の青年もいた。もちろん、まったく起業に触れたことがないPYも多くいたが、起業経験のあるなしにかかわらず、毎回のコースで見せる根性や積極性には驚かされ、私自身が何度助けられたか分からない。特に印象的だったのは、東京での課題別視察で「パクチャーハウス」を訪問した時だった。Ex-PYであり、東京の世田谷でパクチャー専門レストランをオープンさせた佐谷氏のお話には、PYたちも大いに感動した様子だった。「世界青

年の船」事業やバックパックを担いで世界を旅した経験と、ご自身の結婚と子供の誕生、そして趣味が高じてのお酒とマラソンという全ての要素が並行した独特のキャリアの持ち主である佐谷氏の話には、青年たちは非常に刺激を受けた様子だった。例えば、一般的なイメージからするとラテンの国で自由闊達そうなメキシコでは、学歴や肩書きで判断される窮屈さはさほど日本とは変わらず、「好きなこと」よりも「社会的に認められること」が仕事においては重視されているということもメキシコの参加青年がコースの中で共有した。JPYのみならず、OPYにとっても、佐谷氏のように自由に自分らしい起業を实践するSWYの先輩は、起業の大きな可能性を感じさせるものであり、講義中の質問はもちろん、にっぼん丸乗船後も、たびたび彼の話が話題に上った。

この他にも、印象的だった場面は多々あるが、一つ選ぶとすれば、最後のセッションで実施したビジネス・プラン・コンテストを挙げたいと思う。5~6人の小グループに分かれて、PYたちがお互いにアイデアを出し合い、それぞれ具体的なビジネスと、お金が循環する仕組みを考え、5分間のプレゼンテーションで発表するという趣旨のものだ。特別審査員として招いたマイク・マツノ先生から、様々な質問が投げかけられる中、しどろもどろになるグループもあれば、しっかりと受け答えするグループもいた。中でも、ニュージーランドのPYがリーダーとなったグループはひと際目を引いた。自分のワードローブ(衣装ダンス)をネットを通じて有料で貸し出せるサービスを考案し、船内のスペースを巧みに使いながら、動画と画像、音楽を組み合わせるその仕組みを上演し、見事投票で1位を獲得した。実際に日本でもこうしたサービスが人気を博しているが、ニュージーランドを含め、まだこのシステムが浸透していない国や社会では十分にビジネスとして成り立つ可能性を秘めている。このグループに限らず、コースの中で行われた、こうした情報やアイデアの交換こそが、この世界で一步先んじることのできるアクションだと思う。世界を変えるのは一人一人の勇気ある一歩から。船を降りた後、PYがそれぞれの国で新たなチャレンジへと踏み出すことを心から願っている。

.....

5. 参加青年の感想

吉崎唯(日本)

青年起業コースにおいて、私が困難を乗り越えた瞬間は、少人数のグループで自分のビジネスプランを発表した時でした。初めは、OPYのほとんどが、社会人経験や、ビジネスを行うための知識を持っていたため、彼らとのディスカッションについていけませんでした。その少人数でのディスカッションで、私は自分のビジネスアイデアを提案しました。グループのメンバーが「どう

してその事業を始めたいのか」「誰がそのサービスを使用するのか」と尋ねましたが、私は即答することができず、一度は自信を失いました。しかし、根気よく私の意見を引き出してくれて、私も熱心に意見を伝えた結果、最終的には、私の提案を基にビジネスプランを作るという結論に至りました。このアイディアの発表をする時、メンバーを代表して、着物を共有するウェブサイトのアイディアについて、プレゼンテーションを行いました。その後、メンバーは私の発表について、「よくやった」とほめてくれました。私にとってはチャレンジでしたが、プレゼンテーションを行ったことで、達成感を感じ、自信がつかしました。このように、青年起業コースのセッションは全体的にとっても刺激的でした。

また、印象的だったファシリテーターからの学びは、「ワーク・ライフ・ブレンド」というアイディアです。このアイディアは、個人が自分らしさを理解し、自身の働き方を創り、それを続けていくことを意味しています。これは、働くことについての自分の見方を変えてくれました。その他にも、青年起業コースのメンバーも私に新しい視点を与えてくれました。全てのメンバーが社会を変えたいという確固とした情熱を持っていたことに驚き、また尊敬しています。この刺激と学びを忘れずに、SWYを終えた後も、社会起業についてもっと理解を深め、行動を起こしていけるようになりたいと考えています。

ヴィオレタ・ガルシア・ディアス（メキシコ）

私が青年起業コースを選んだ理由は、他国でどう起業家精神が機能しているかについて、より広い視点を持ち、成功・失敗についての体験談や起業家とは何かを共有したかったからです。

このディスカッションコースは常に刺激的で活気に満ちていました。私はこのコースを通して自分の人生・キャリア・使命を見付けることができたため、今は自分がとても可能性に満ちていると捉えることができます。

一方で、OPYとJPYの経験をもっと有効活用し、お互いの背景や視点、考えなどを共有して、お互いから学ぶ時間をもっと多くあれば更に良かったとも思いました。時間が足りないくらいでした。

最後のプロジェクトであるビジネス・プランの作成については、とても楽しみながら進めることができ、また、キャンバス・モデルと呼ばれる、いくつかの特定の視点からビジネスを分析する手法について理解を深めることができたこともとても有意義でした。発表内容について、他のPYからフィードバックがもられたことも、自分の視野を広げることに大変役に立ちました。もしもう一度、SWYに参加する機会があったとしても、またこのコースに参加したいと思えるほど、すばらしい体験となりました。

5 サマリー・フォーラム

目的と概要

2月26日に開催されたサマリー・フォーラムは、本事業の中で最も重要なイベントの一つである。233人のPYは事業期間中、六つのコースに分かれてそれぞれ異なるテーマについて学ぶため、サマリー・フォーラムではコースを越えて情報共有をした。本フォーラムは各コースの主な学びを全PYと分かち合う、またとない機会となった。各コースのプレゼンテーションは、パワーポイントの発表だけでなく、寸劇、音楽、映像などを交えて行われ、観客を楽しませるとともに、効果的に学びを共有することができた。

学びの集大成である本フォーラムに参加することで、PYは、共通のテーマである「青年の社会貢献」について、他のコースがどのように学んだのかを理解する機会を得た。また、自身のコースの発表を通して、コース・ディスカッションで得られた学びを振り返り、その学びをどのように社会貢献に役立てることができるのかを明確にすることができた。

コース発表内容

地域づくりコース

地域づくりコースは、プレゼンテーションの冒頭で、対談形式でコース全体の軸となったデザイン思考について紹介した。デザイン思考の五つのステップ、「共感」「問題の定義」「アイディア創造」「プロトタイプ」

「テスト」を段階的に解説するとともに、それぞれの段階についてコース中、PYが議論した具体例も交えた。

対談に続き、コースを代表する8名のPYがステージに立ち、一つずつ地域課題を取り上げ、異なる国や分野の課題に対して解決策を提案した。例えば、日本のPY

は、出身地域の少子高齢化を事例として紹介し、外で遊ぶ児童の減少や、児童と大人との触れ合いが薄れていることを説明した。課題の解決案として、大人が自分の専門分野をいかして様々な活動をリードし、地域に暮らす大人と子供の交流の機会を深めることを提案した。さらに、こうした活動を展開するコミュニティ・センターを設置することで、放課後の児童の居場所を確保し、学校外でも様々な学びの機会を提供できるようになると加え、具体的なアイデアを披露した。

最後に、コースの学びを振り返り、PYによるスピーチが行われた。異なる国の社会事情に耳を傾け、馴染みのない地域課題に対して共に解決策を模索する過程が困難であり、だからこそたくさんの学びが得られたことを成果に挙げ、発表を締めくくった。

防災コース

最初に、防災コースの発表者は、「明日、あなたの暮らす地域に大規模な自然災害が起こることは、想像できますか?」という質問を投げかけた。回答が「はい」という人に挙手を促したところ、その人数は極めて少数だった。この質問と回答から、多くの場合、自然災害とは予期することができず、だからこそ、どこに暮らしていようと、明日、自然災害に襲われることは十分にあり得るということを伝えた。

コースの学びについて、各セッションでどのようなディスカッションが行われたかを紹介した。災害といっても、その定義は一つではなく、第一回のセッションは「災害」という言葉をどのように定義するかというディスカッションから始まった。災害に備え、発生時に迅速に対応するという文脈においては、自然災害に加え、人災も災害の定義に含める必要があることを理解した。さらに、インドとスリランカの課題別視察では、いずれも地域の防災・減災に貢献する研究機関を訪問し、災害対策には、地域の住民、政府、NGO/NPOなどの市民団体との緊密な連携が不可欠であり、こうした連携においてリーダーシップを発揮できるようになることが、防災コースのねらいであったことが改めて示された。

最後に、防災分野でリーダーシップを発揮するためには、どのような姿勢や能力が求められるかをまとめた。災害時には、被災者や利害関係者とのコミュニケーションにおいて、透明性を確保すること、共感する心を持つことが重要であるとし、知識だけではなく、いざという時に迅速な行動やリーダーシップが伴う人間になることを目指すと宣言した。

教育コース

教育コースの発表は、PY全員を巻き込んだ手話のワークショップから始まった。これは、スリランカの課題別視察で訪問した盲ろう学校において、生徒に教えても

らった手話からインスピレーションを受けたものである。

その後、「教育的リーダーとは何か」という問いを中心に対談形式でコースの学びが紹介された。東京の課題別視察では、生徒が受け身になりがちな日本の従来の教育方法ではなく、生徒の好奇心や創造力を引き出すワークショップを通して授業を行う塾を訪問したことを、活動の写真と共に解説した。また、インドの課題別視察先では、女性の社会進出と活躍を応援し、生徒たちの学業だけでなく、インターンなどの就業体験や進路指導に力を入れる学校を訪問した。スリランカでは盲ろう学校を訪問し、児童がPYたちと伸び伸びと、積極的にコミュニケーションをとることに驚きと喜びを感じたことを強調した。訪問先の学びとコースのディスカッションの内容は、一貫して青少年のエンパワメントであったことがうかがえた。

最後に、コースを代表して2名がスピーチを行った。自分が暮らすコミュニティにおいて、自分を含む誰もが教育的リーダーであるということに気付けたことや、好奇心を引き出し、人と人の出会いの空間を作れるようになるという目標ができたことをコース・ディスカッションの成果に挙げ、発表を終えた。

環境コース

環境コースの発表が始まると、コースのメンバー全員がステージに集まり、それぞれがコースの中で学んだ内容から印象的だった言葉を書いた画用紙を掲げ、ギターの伴奏にあわせて歌を歌った。“We can do it together”（一緒ならきっとできる）という歌の歌詞には、事業が終わった後も、学びをいかして皆で環境問題に取り組んでいこうという意志が込められていた。

次に、自分たちの孫の世代の人々から、自分たちに宛てられたSOSの手紙、という設定で、初回のコース・ディスカッションでPYたちが書いた手紙が紹介された。環境破壊や気候変動が進んだ60年後の未来から、そこに広がる光景と、過去の世代の責任について言及している手紙は、現代に暮らす私たちの日々の営みがどのような結果に辿り着くかを改めて考えるワークショップであったことがうかがえた。

地域の資源をいかし、環境負荷の少ない暮らしを実践するトランジション・タウンについてのディスカッションは、PYの出身地域の特性をいかした新しいライフスタイルを検討する機会となったことを発表した。さらに、にっぽん丸の洋上を一つのコミュニティとみなし、トランジション・シップを形成する、というワークショップの成果として、デッキの緑化や、エネルギー消費の削減など、ユニークなアイデアが披露された。まさに、コースのテーマである「SWYから持続可能な社会を！」にふさわしい活動と学びの発表となった。

情報・メディアコース

情報・メディアコースは、メディアが扱う情報の正しい理解と、効果的かつ責任ある情報発信の方法について学んだ。サマリー・フォーラムでは、PYが作成した動画を上映した。いくつかのグループに分かれて作成した動画は、硬派な内容からユーモアにあふれるものまで、多種多様であったが、いずれも自分たちがメディアの担い手となってメッセージを発信するときに、どのような工夫や注意が必要かを考える、貴重な機会であったと発表した。

また、各国のメディア事情に関するディスカッションの成果として、各国のメディアにまつわる社会問題を紹介した。表現の自由やメディアの信頼度など、国によって異なる社会事情を理解した上で、過度な情報化社会や、偏った報道が各国共通の社会課題であるという認識に至ったことを説明した。また、過度の情報化から隔離されているコミュニティの例として、にっぽん丸の洋上生活を挙げ、会場の笑いを誘う場面もあった。

発表の最後に、メディアを選び、情報を精査する能力、すなわちメディア・リテラシーの向上が必要不可欠であることを前提とし、日常生活において、情報源や情報が発信されている背景を読み解くことの重要性を強調した。

青年起業コース

青年起業コースは、まず簡潔にコースから得られた学びを紹介した。各PYが、このコースを選んだ動機や将来の展望を共有することでお互いからインスピレーションを受けたことや、各国の起業事情は異なるが、起業家に共通する素質がアイデアと情熱であることなどを発表した。

コース活動では、PYが知恵を絞って起業案を発表し合うビジネスプラン・コンテストが実施されたが、中でも特に優秀なアイデアを、サマリー・フォーラムで他のコースのPYと共有した。それは、個人が所有している服やアクセサリーを、需要に応じて貸し借りができるサービスであり、このサービスは、インターネット上で需要の確認や、受取と返却の手配ができるなど、ビジネスとして成立させるための工夫が見られた。さらに、このサービスが実際どのように機能するかをドラマで実演した動画を上映し、会場は和やかな笑いに包まれた。

最後に、若手起業家に必要なスキルの向上やキャリアサポートをするバーレーンの起業家育成プログラムが紹介された。優秀な起業家が育ち、社会で活躍することが、より良い社会を築くことにつながるという考え方が普及し始めていることを述べた上で、この事業を終えた後も、起業家スピリットをもって社会貢献できる人材になりたいというコース全体の展望を示し、コース全体のまとめとした。

異文化理解セミナー

異文化理解セミナーは、以下の成果をねらい、全PYが参加するセミナーを3回実施した。

- 異文化に触れた際に、その文化を尊重し、敬意をもって対応できる姿勢を身に付ける。

- グローバル社会におけるどのような場面においても、異文化理解とそれに必要なコミュニケーションを実践できるようになる。
- グローバルな文脈で俯瞰的に自身の文化、文化的アイデンティティを認識できるようになる。

1 異文化理解セミナー

このセッションの目的

このセッションでは主に二つのテーマを扱う。一つは異文化理解コミュニケーション、そしてもう一つはハラスメントについてである。

異文化間のコミュニケーションは、いくつかの異なる理由から非常に重要である。まず、異文化の人々とながら、コミュニケーションをとるためである。特にここSWYでは、11か国からPYが集まって、寝食を共にする。こうした環境で、他国の青年と理解し合い、友情を育むことは非常に重要である。それに加え、異文化理解

コミュニケーションは、ビジネスから、友愛や親善の発展、更には世界平和の実現に至るまで、私たちの生活のあらゆる場面において効果的なコミュニケーションである。次に、異文化理解コミュニケーションについて学ぶことは、自身が所属する集団がどのような価値観を持っているのかを理解し、自分の文化やアイデンティティについて学ぶために役立つ。さらに、異文化理解コミュニケーションの体得は、異なる文化を持つ人々との円滑なコミュニケーションを助け、将来、出身地域とは異なる

文化圏で暮らす機会、あるいは異なる文化圏からやって来た同僚と一緒に仕事をする機会、そして良い職場で働く機会に有益なスキルとなるだろう。将来国際社会の一員となるために、そしてグローバルリーダーになるために、必要不可欠な、異文化を理解する能力を身に付けることを目標とする。

また、この事業には、11か国から総勢233名のPYが集い、そのうち男性は94名、女性は139名が参加している。たとえ悪気や悪意がなかったとしても、時には、文

化や倫理観の違いに気付かずに、無意識に誰かを傷つけたりしてしまうこともあり得るだろう。このように、理解の不足や誤解が原因で、誰かに恥をかかせたり傷つけたりすることがあり、それらはセクシャル・ハラスメント、アルコール・ハラスメント、パワー・ハラスメントなど、いくつか異なるハラスメントとして認識されることがある。ハラスメントに対する正しい認識が、PYの正しい行動を促し、問題の予防に役立つ。

内容

講義の冒頭で、「文化とは何か?」という問いが投げかけられた。この問いについて考えることで、PYは、文化とは価値観や信条が集まって構成されるもので、目に見えたり、簡単に理解できるものではないということを学んだ。人々が文化をどのように知覚しているかを表す「文化の冰山」という図は、文化に対する異なる解釈を表していた。この図から、物質から読み取れる文化があることを学んだ。例えば、食べ物や飲み物、衣服など、多くの人々が文化を定義する際に触れるものだ。もう一つの要素として、必ずしも目で見ることができない、価値観などが挙げられた。この図から、PYは、真に異文化を理解し、多様性を受け入れるためには、文化には、目に見えない要素があるということを心に留めておく必要があることを学んだ。

「水から上げられた魚」という表現は、普段と異なる環境において、ある文化圏の人が持つ視点が、必ずしも異なる文化圏の人が持つ視点と合致せずに、誤解につながることを説明する際に用いられる。例えば、オーストラリアのPYは、自身が先住民アボリジニであるにもかかわらず、彼女の透き通るような肌の色から、周りの人々がそれを信じないことがあるという事例を挙げたが、これは、多くの人々が、先住民の肌の色は白くないという先入観を持っていることを物語っている。人々

がとても強い先入観を持っている場合、肌の色が人種を決定する根拠にはならないことを理解してもらうことが非常に困難であるという経験を彼女は共有した。また、ロシアのPYは、多くのPYが、「ロシアの厳しい寒さに比べれば、あなたにとって東京の冬は寒くないだろう」と声をかけると発言し、ロシアの気候に対するイメージが先入観につながっていることを紹介した。

セッションの最後に、アドバイザーのマイク・マツノ先生は言葉によるハラスメント、パワー・ハラスメント、アルコール・ハラスメントなど、ハラスメントの種類について説明した上で、セクシャル・ハラスメントについて講義を行った。パーレーンのPYは、女性が肌の露出が目立つ衣服を着ているとき、自身の正当性を主張することがいかに難しいかという話を紹介した。ハラスメントの被害に遭ったときに、被害者としての立場を認められないからである。また、ニュージーランドでは、証拠がなければセクシャル・ハラスメントの被害がなかなか認められない一方で、スリランカでは、被害を相談するシステムが確立されていることなどが紹介された。

このセミナーから、PYは文化がいかに異なる価値観を反映しているかを理解し、またPYの体験の紹介から、他者に対する理解と受容の重要性を学んだ。

主な学び

第一回目の異文化理解セミナーから、PYは知覚や期待、誤解など、いずれも良い結果をもたらすかもしれない、悪い結果につながるかもしれない、異文化理解にまつわるコンセプトを理解することができた。一言で言うと、異文化コミュニケーションとは異なる文化間の人々の交流という意味を含んでいる。文化間の交流がなぜ重要かということ、それらは人々がつながるための手段として、また自己認識を高める手段として、更にはコミュニケーションやリーダーシップといったスキルとして機能するからである。

文化に関するもう一つの重要なテーマは、文化は特定

の何かを指す単語ではなく、多様な価値観や信条、人々の行動など、多様な側面を捉える言葉であるという点だ。物質的な意味合いで言葉が使われる場合と、主観的で、目に見えない何かを指すために用いられる場合の両方がある、ということを理解しなければならない。前者は、例えば衣服や食べ物・飲み物、言語、音楽、美術といった、基本的に人が作り出すものを指す。後者は、思想や態度、信念そして物事の前提となる考え方など、実体のないものである。このことから、文化は生まれながらに体得しているものではなく、成長する過程で学ぶものであると言える。この文化の意味を理解することは、

時に非常に困難である。文化とは、リーダーシップや責任という概念の捉え方から、社交のマナー、仕事を進めるスピード、判断を裏付ける理論や妥当性、問題解決の方法、役割、性別、地位、倫理、権威、友情や時間に対する考え方におけるまで、異なる定義を形成する。

一方で、価値観は最も重要であると認識されるべきで

す。国家間で文化の多様性が存在するとき、例えば、調和、平等、個性、地位、自由、年齢、伝統、余暇の過ごし方、家族や友人に対する価値観は、集団の方向性を示す指標になる。それが好ましい結果を導くこともあれば、望ましくない結果につながることもあるということを学んだ。

参加青年からのフィードバック

- 今回のセミナーでは、異なるバックグラウンドを持つ人々とより良いコミュニケーションをとる方法を学ぶことができ、大変貴重な経験となった。今回学んだことは今後の国際交流経験に必ずいかせると思う。
- SWYではたくさんの国の人とコース・ディスカッションやコミュニケーションを通して関わり合う機会があるが、その中にはトラブルなどの問題も含まれている。しかしその問題からPYが新しく気付くこと、学べるがあると思った。今回のセミナーを通して、相手を理解するためには諦めずに繰り返しコミュニケーションにチャレンジしてみることが大切だと感じた。この経験をSWYに限らずその他の場面においてもいかし、周囲の変化や起こりえる問題に対して寛容に受け止めたい。
- 一つのトピックに対して様々な意見が出たのがとても面白かった。また、同じ日本人同士でも異なる考えを持っているのが興味深かった。その人がどのように生きてきたかがその人の人格を作る重要な鍵になるのだろう。それぞれの文化や考え方を尊重し受け入れることが異文化理解への大きな一歩だと感じたのでこれ

からの事業、特に船上生活において積極的にコミュニケーションをとり実践していきたいと思った。

- 異文化理解のための講座ではあったが、IDIやリーダーシップに関数講座とリンクするところがあり、共鳴することが多々あった。SWYの目的である「グローバルリーダー育成」のために必要なものは根源をたどると共通していることを再認識した。偏見や思い込みをなくすために積極的にどんな人でもコミュニケーションをとって理解を深めたい。また、最も重要なことは皆それぞれの言語を各自の文化に反映させていることである。この言語の効果によってPYの気持ちや文化的差異の理解を考えることができる。異文化理解において重要なことはステレオタイプを持たず、お互いを尊重することである。
- 今回のセミナーは異文化理解の初めの一歩をもたらしてくれた。異文化理解の知識を映画の抜き出しや写真を用いて視覚的に学ぶことができた。文化の差異を超えたより良いコミュニケーションができるようになりたい。

委員会としての学び

委員会として次にいかにすべき学んだことは主に四つ挙げられる。

- セミナーの最初にPYの席順を変更する必要があり、その際、付箋に国の名前を書いて机に貼り、自分で机を見付けるといった形をとった。スムーズに行くことを予想していたが、予想外にも自分の机を見付けられないPYが続出するなど、席順を変えるだけで少なくとも10分はかかってしまった。委員会メンバーによる非効率的な席順変更の方法によって、マイク先生のセミナーの時間が短くなった。240人を一度に動かすのは大変だということを心に留めて、今後はOPYからの意見も踏まえながら効率的な方法を模索する。
- 休憩後の開始時間に集合しないPYがあり、予定していた時間通りに始めることができなかった。この反省をいかして、次のセミナーでは、異文化理解セミナー委員が入口付

近で誘導し、タイムマネジメントに努める。

- 休憩後のセミナーの開始が予定時間より遅れた要因の一つとして、休憩時間中にPYがマイク先生と話していたという理由が挙げられる。熱心なPYが、マイク先生と話しこんで、開始時間が過ぎてしまったことがある。時間が迫っていたら委員会が積極的に声をかけ、会話を中断してでも開始時間に間に合うように心がける。
- セミナー内でディスカッションを行った後にいくつかのグループから意見を聞く際、ワイヤレスマイクを使用したが、広い講義室で発言者にマイクを手渡すための連携が不足していた。貴重な講義時間を最大限活用するために、今後はセミナーの流れを委員全体でしっかりと把握し、セミナーの流れを止めたりしないように、委員会内で協力体制を作る。

アドバイザーからのコメント

第一回目の異文化理解セミナーは、JPYの一部にとって、私が話す英語の速度が速すぎたということを除けば成功だった。ゆっくり話すようにと何度か促され、速度を落とすように努力もしたのだが、物語の流れや、重要な点に触れる際に、効果的に伝えるにはどうしても一定の速度のリズムやテンポが必要となるため、常にゆっくりと話すことは必ずしも容易ではなかった。

そこで、OPYには、内容の理解に困難が生じているJPYに必要なサポートをしてくれるよう頼んだ。初回のセッションでどのくらいの内容を網羅できるか予測がつかなかったが、用意したプレゼンテーションのスライドのうち半分までしか終わることができず、残りは2回目のセッションで扱うこととした。セクシャル・ハラスメントに関する内容は扱いに注意を要したが、用意した項

目は全て終わることができた。私のセミナーについて、OPYや英語が堪能なJPYが感謝の気持ちを伝えに来たことから、彼らにとって有益な内容であったのだと認識している。それに対し、海外留学経験がないJPYの学生には、セミナーの内容は馴染みの薄いものとなったかもしれない。端的に言えば、語学力に乏しいPYや、社会人経験や人生経験が少ないPYにとっては、セッションへの積極的な参加やディスカッションへの貢献は非常に限られていた。この状況は不可避だったように思う。将来的に両者の差を埋めるためには、JPYの中に、英語が堪能で、6週間の研修に参加できる、経験豊かな若手社会人を多く参加させることだろう。セッションで話される英語の速度が速いと感じる問題も、解消できるように思う。

2 異文化理解セミナー

このセッションの目的

今回のセミナーの目的は主に三つある。一つ目は、PYが日本人の価値観を理解することである。OPYが異文化を理解する能力を養い、同時に、JPYが、自分たちの文化をより深く理解することにより、日本人の価値観が、OPYとのコミュニケーションにどのような影響をもたらしているかを検証する。JPYとOPYがお互いの文化に対する理解を深めることで、研修における両者の有意義な学びを促進することを狙いとした。

二つ目は、事業の目的でもあるリーダーシップ育成に向けて、リーダーシップ・セミナーと異文化理解セミナーのコンセプトをつなげることである。PYは、ある文化圏におけるリーダーシップスタイルが、他の文化圏の青年にどのように影響を与えるかについて議論した。そこで、リーダーシップ・セミナーで学んでいる内容を

踏まえ、今回のセミナーでは文化とリーダーシップがどのように結び付けられているかに焦点を当てた。

三つ目は、日常的な題材を使って、異文化を理解するための視点を養うことである。異性に声をかけて相手の関心を引く、あるいは自分の魅力をアピールする際、国ごとの違いを検証することで、それぞれの文化の基準によって、受け入れられる行動、受け入れがたい行動があるということを経験の題材とした。どのような行動がハラスメントとして認識されるかについても検証した。セミナーの一部を担当した異文化理解セミナー委員は、身近なテーマを用いることで、異文化理解について初めて学ぶPYにとっても、教育的かつ活発な議論をすることができるきっかけとなるというアイデアから、「異性に声をかける」という題材の動画を使用した。

内容

「異文化の壁とは何か」 マイク先生は、他者とのコミュニケーションや、得られる回答が、自分の予測と異なる場合に、異文化の壁が現れることを説明した。その後、船上生活における異文化間のコミュニケーションに影響を与え得る、日本の価値観やコミュニケーションのスタイルについて解説した。また、言葉を使ったコミュニケーションと言葉を使用しないコミュニケーションや、高コンテクスト（＝言葉だけでなく、態度や表情など複合的な手段を駆使する意思の伝達方法）と低コンテクスト（＝主に言葉だけに頼った意思の伝達方法）の違

いについて触れ、異なるコミュニケーションスタイルである両者が交流すると、意思疎通に支障が生じることもあることなどを説明した。また、拒否や否定を示すときのジェスチャーや話し方、さらに、沈黙が何を意味するかが、国によって異なることなどを解説した。同じジェスチャーが国によって別の意味を持つことについて学ぶ機会となった。

マイク先生による講義の後、異文化理解セミナー委員による初めてのアクティビティが行われ、各国におけるリーダーシップの文化的な側面が扱われた。PYはリー

ダーシップ・セミナーで、リーダーの多様なモデルについて学んだばかりだったため、今回の異文化理解セミナーでは、自国の文化を踏まえて、リーダーに必要な要素を五つ挙げ、各国がどのようなリーダーシップに価値を置くかを議論した。たくさんの意見や質問が出されたことから、リーダーシップのスタイルが、それぞれの文化を反映し、多様であるということを理解した。

主な学び

今回は「文化とリーダーシップ」についてその関係性から、異なる文化によって求められるリーダーシップ像の違いを学ぶことができた。事業の目標の一つでもある「リーダーシップの向上」について、文化という新たな視点から焦点を当てることで、有意義な議論をすることができた。特に、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション、高コンテキストと低コンテキストの観点を踏まえて、リーダーシップの在り方について議論を重ねた。各国の文化による振る舞い、姿勢、価値観などを共有することは、大変興味深かった。例えば、ある国では年齢が、別の国では多くの仕事をこなすことが、さらには、良いスピーチができる能力が、リーダーに求められる国もあり、文化を踏まえたたくさんの要素が挙げられ、文化がリーダーシップに多く影響していることが分かった。マイク先生は、日本の文脈には、異なるニュアンスを示す“NO”や“SORRY”の使い方があることを講義で触れ、それはPYたちをとっても驚かせた。ユーモア、尊重、土地柄、責任、マネジメント、社会的立場、人を取りまとめる力、スピーチのセンス、多文化理解能力、性格、平等な振る舞いなど、

セミナーの後半では、“Do you like the way I am?”（私のこと、どう思う？）というタイトルの動画を視聴した。これは、異なる文化圏で、バーにおいて異性の気を引くためにどのような行動がとられ、またそれに対する反応がどのようなものかを描写していた。動画を見た後、PYの何人かからは自身の過去の体験談が共有された。

その国の文化とリーダーシップの間に存在するたくさんの重要な要素を知った。

また、各国のリーダーシップの違いについてもディスカッションが行われた。政治家などの例を挙げ、各国のリーダーがどのような人物か、また、国民とどのように接しているかも話し合われた。自分が持つリーダー像は自国の文化の影響がどのように影響しているかを話し合うことによって、今後SWYでどのようなリーダーシップを発揮したいか考えることができた。

最後に、“Do you like the way I am?”という動画を見た。異性を目の前にする時にとる行動が各国ごとに表現されている動画であり、文化の違いによって選ぶ言葉やジェスチャーの違いを見ることができた。また、同じテーマでアラブ首長国連邦の青年たちが寸劇を行い、異国の文化がどのような考えを持っているか知ることができた。

今回の異文化理解セミナーでは、言語コミュニケーション、非言語コミュニケーションの講義を聞き、青年同士で自国の文化の違いを話し合うことによって、お互いの文化をより深く理解し、尊重できるようになった。

参加青年からのフィードバック

- 第二回の異文化理解セミナーは、内容の全てが大変興味深かった。マイク先生の講義では、主に日本の文化や価値観について学んだ。文化的価値観や信念がいかにして行動へとつながっているのか、また人々の文化的行動がどのようにコミュニケーションに影響を与えているのかを学ぶことができた。この講義から学んだことは、SWYにおいてもOPYとJPYのコミュニケーションの円滑化を進める上で役立つだろう。リーダーシップに関するディスカッションでは、異なる文化では異なるリーダー像が存在することが分かった。最後に、国や文化によって異なる異性への声のかけ方についてのビデオは、今回のセミナーの中でも特に面白かった。みんなが興味を持つトピックであり、さらにはこの多文化の環境において、異なる意見が集まりディスカッションしやすいテーマだった。
- マイク先生に日本人の価値観について講義していただいたことで、OPYの日本人の価値観への正しい理解につながり、JPYにとっても、SWYという多文化が

共生している環境で日本人としてのアイデンティティを再認識でき、嬉しかった。アクティビティ2では、プログラム中の実体験をタンザニアPYに共有してもらい、タンザニアと日本のスキップの違いを発見でき、非常に良い雰囲気であり、実りのあるディスカッションになった。

- 本事業に限らず国際化が進む昨今、思考を言葉で明確に表現する欧米社会に対し、あえて曖昧にすることで和を保ってきた日本社会との違いは多くの場面で鮮明に表れる。今回の講義では、その違いを11か国の青年全体で可視化及び共有することで相互不理解を解決するための貴重な一歩になった。また、目標への情熱や他者への理解、中立性など、各国で共通して必要とされるリーダーとしての素質について論議したことで、国際社会で必要とされるリーダー像を明確に認識することができた。このように、多様性に恵まれた本事業の環境を最大限いかし、異文化を受け入れ、溶け込む自らの素地を作り上げていきたい。

今回の異文化理解セミナーにおいて、異文化理解セミナー委員はチームワークとイニシアチブを大いに発揮することができたと感じている。この二つの点について、下記の通りまとめる。

チームワークは、今回のセミナーで非常にうまく機能していた。委員会の全てのメンバーが積極的にセミナーの運営に貢献していることが感じられた。モーニング・アセンブリーが終了し、全PYが一旦、会場の外に移動すると、委員会のメンバーは予定どおり会場の後方に集まり、前日に決めた会場レイアウトに従って速やかに椅子を配置した。また、全体的に、委員同士がお互いをサポートしていた様子からも、良いチームワークが感じられ、「お互いを尊重し合う」という私たちのスローガンを体現する結果となった。委員として学んだことの一つは、今日、委員の一人一人が実践したように、私たちが自分の役割に対して当事者意識を持ち、目標のために前向きに貢献することで、どのような環境においても成功を掴むことができるということである。

イニシアチブについて、ジョンC.マクスウェルは、著書「リーダーシップの法則」の中で、誰もが船を操縦することができるが、そこには航路を決めるリーダーが必要である、という航海の原理を紹介している。セミナーの成功を確実なものとするために、委員一人一人がまさにこの文章に示されるようなイニシアチブを発揮した。セミナーで行うアクティビティを組み立てる段階から、様々な委員が必要に応じてサポートをし、皆が準備に活発に携わった。また、セミナーの開始時間に、PYが会場に戻ってきたことも例に挙げられる。次回のセミナーのアクティビティを担当する委員は、会場設営さえ手伝え、後は椅子に座って進行を見守ることもできた。しかし、ある委員は、委員会がサポートを必要としていることに気づき、マイクを通してどこに誰と一緒に着席するのかを案内した。彼の行動はPYを集め、速やかにセミナーを開始することに大きく貢献した。委員会は、いつでも可能な限りのサポートができるように準備しておくことの重要性を学んだ。

アドバイザーからのコメント

第二回目となるセミナーでは、当初予定していたカルチャー・ショックや、異文化コミュニケーションの理論とスタイルなどの内容を変更し、PYが必要としている船上生活に直接関係する課題や挑戦について扱うこととした。PYと食事を共にする中で、セミナーで扱うべき内容は、PY同士のコミュニケーションやお互いの文化の理解に役立てることができる、基本的で実践的なアイデアであるという結論に至ったからである。

JPYとOPYとの間の異文化理解において、壁となり得る要素は二つに分類することができる。一つは、複雑な内容の理解、伝達には困難が生じる、JPYの平均的な英語力である。もう一つは、PYの間の教育的背景や人生経験、社会人経験の差である。JPYはほとんどが大学生である一方で、OPYの多くが社会人としてそれぞれ多様な分野で活躍しており、また、大学生だったとしても、課外活動を通して様々な分野のプロジェクトに携わっていた。そのため、OPYが議論したり活動したりする際の平均的なレベルが、JPYのそれを上回ってしまうことがある。

セミナーではまず、日本人の文化的価値観について焦点を当てた。その目的は、OPYが、JPYの言動をどう解

釈しているかについて理解を深めることに加え、JPYがOPYに対する自分たちの言動を振り返り、そこから何かに気付いてもらうことである。セミナーで触れた日本人の価値観には、古いものも含まれていたが、それらは日本人の考え方やコミュニケーションのスタイル、言動などの中に深く根付いているものだと思う。そこで、日々の生活の基本的な場面で見える日本の文化的背景について触れた。例えば、日本では、ちょっとした世間話の切り出し方を身に付ける機会が限られていることや、沈黙していること自体は特に問題視されず、常に話すことが求められる環境ではないことを話した。次に、高コンテキストと低コンテキストについて説明し、コミュニケーションの文化的な違いについて説明し、また集団主義の文化と個人主義の文化があることにも言及した。あまり理論的な内容は追求せずに、それぞれの特徴や、異なる文化背景の間に生じる期待の違いなどに焦点を当てた。また、これらの内容は一般論であり、必ずしも同じ文化圏の出身者が皆同じようにコミュニケーションをとるわけではないことや、私たちは相手が誰であるかを考慮してコミュニケーションのスタイルを変えているであろうという点に注意すべきであると伝えた。

3 異文化理解セミナー

このセッションの目的

今回のセミナーには三つのパートに分かれ、それぞれ異なる目的が設定されていた。一つ目は、マイク先生による講義だった。この講義の目的は、「リエントリー（訳注：元々自分が所属していた文化社会へ戻ること）」、つまり、PYがにっぽん丸を下船し、それぞれの国に帰った後、どのように現実社会に再び馴染むことができるかについて、理解することである。この講義を通して、PYは今、航海の最後の区間で感じていること、事業終了後に感じるものが正常であり、その感情をコントロールする方法があるということを理解する。

次に、委員会による、演劇形式のアクティビティが行われた。目的は短い劇を通して、異文化間で起きた誤解の例を示し、メッセージを伝えることである。レター・

グループごとに設けられた劇のシナリオは、2週間前に実施されたアンケートに対して、PYから寄せられた回答を基に、実際に身の回りで起きたことを基に作られた。したがって、このシナリオは、PYが自分たちの体験を検証し、そこから何を学び、どのように今後の人生にいかすことができるかを考えるための材料となった。

最後に、アンケートの成果を基にプレゼンテーションが行われた。PYの事業期間中の異文化体験について尋ねるアンケートが事前に実施された。その結果を発表することで、JPY及びOPYが、どのような文化の違いが大きなチャレンジであると感じたのか理解することを目的とした。

内容

冒頭で、マイク先生は、事業が終わりを迎えることに触れ、その事実に対して、個々人が感情的、心理的にどのように対応すべきかを尋ねた。自分が所属する文化圏の外で一定の時間を過ごした人が、自国に戻った時に経験する思いがけないカルチャーショック、いわゆる逆カルチャーショックを紹介した。帰国後に再会する家族や友人や上司を含む、あらゆるつながりのある人たちが、PYの新しい思考や物の見方を受け入れてくれるとは限らず、特に、帰国後就職するJPYはそういう状況を体験し得ることを伝えた。これを踏まえ、事業で習得した視点を維持し、事業を通して達成した自身の成長や発展に意識を向け続けるにはどうしたらよいらうかと問いかけた。

次に、委員会のメンバーが演劇形式のアクティビティを行った。事前に、レター・グループごとのミーティングでPYの異文化体験について尋ねるアンケートを配布し、その回答の中から11の出来事を取り上げ、演劇の題材とした。それらは、ホームステイ中の体験から、食事の席やイベント中の、文化的な違いから生じたマナー違反に至るまで、広い範囲に及んだ。各レター・グループは、これらの題材を一つずつ無作為に与えられ、題材

に基づき2分間の寸劇のシナリオを作った。劇はどれもユーモアにあふれていたが、同時にそれはPYが、異文化間対応における成長を反映している内容でもあった。

次に、二人の委員会のメンバーがアンケートの結果について発表した。JPY81名、OPY107名、合計188名から回答が寄せられた。この発表は、事業開始前と事業期間中のPYの期待の比較や、JPY、OPYそれぞれが、異文化理解に関するどのようなことをチャレンジとして捉えたか、また面白いと感じたかなどについて焦点を当てた。JPYもOPYも、約半数が、事業はほぼ期待どおりのものだったと回答している一方で、JPYは言語の壁を、またOPYは価値観の違いによって生じる誤解を挙げたことから、コミュニケーションにおける課題が一番大きかったということがうかがえた。

最後に、マイク先生が、事業を記録した動画を流し、PYのユニークな経験を懐かしさとともに振り返る機会を提供した。「一期一会」という言葉を用いて、PY全員が、ここで育んだ友情を忘れることなく、これからも大切にしようにと繰り返した。また、動画には管理部からPYに向けた応援のメッセージも含まれていた。

主な学び

今回の異文化理解セミナーは、事業の終わりに二つの重要な概念を扱った。セミナーはマイク先生による講義で始まり、リエントリーについて触れた。リエントリーという概念を理解するための重要な問いは、「事業を終え、それぞれの国に帰ったときに、PYは何を感じ、ど

んなことを体験するのだろうか？」である。この講義は二つの要素から構成されていた。一つ目は、リエントリーと逆カルチャーショックについて理解すること、二つ目は、この事業の外で体験するそれらの現象に対して準備することだ。

ナショナル・プレゼンテーションや日々の会話やセミナー、ディスカッションにおいて、PYはたくさんのカルチャーショックを経験した。その結果として、PYが事業を終えて船を離れば、逆カルチャーショックに遭遇するだろう。地元に戻って、違和感を覚えたり、うまく馴染めない感覚を持つかもしれない。そこで、マイク先生はどのようにモチベーションを維持し、下船後どんな活動をすべきかを提案した。例えば、ex-PYも含め、この事業で出会ったPYと連絡を取り合うことや、前に進む続けるために、SWY以外の国際的な集まりに参加することなどが提案された。

多くの人が逆カルチャーショックを経験しており、もし私たち自身がそれを経験することになっても、決して自分一人で抱え込む必要はないということを学んだ。また、このプレゼンテーションを通して、事業期間で残されている時間があとわずかであることを実感した。マイク先生は、「誰もがこの船の上で何かを学んでいるが、その学びは一人一人、違った内容である」と述べて、他人との比較ではなく、自身が精一杯挑戦することを後押しした。PY全員にとってこの事業が特別であり、一人一人に異なる価値を提供していることを改めて理解した。まとめとして、事業が終わった後の人生において、私たちがどのような未来を選択するかは、私たち自身しか決めることができないということを学んだ。

次に、委員会のメンバーが、PYをレター・グループごとに分けて、テーマに基づく寸劇を作るように指示した。また、各グループは劇の終わりに、その劇からどのような教訓が得られるかを説明することとした。この事業を通して、11か国から派遣された青年が共に暮らし、日常生活の中で時には文化の壁に直面することもあった。こうした文化の壁が深刻な問題へと発展するかどうかは、私たちの心の持ち方や捉え方次第である。

また、異文化理解セミナー委員は、JPY、OPYそれぞれから集めた、異文化理解に関するアンケートの結果を公表した。このアンケートは、PYが事業期間中に困難を伴った異文化体験について尋ねた。多くのJPYにとって、語学力が原因でコース・ディスカッション中の議論に深く関われなかったことを挙げた。一方、OPYは、母国から離れて異なる文化にさらされたオリンピックセンターの施設と回答している。次に、事業期間中に楽しむことができた異文化理解体験について尋ねたところ、JPYは、忘れることができない経験となったナショナル・プレゼンテーションを挙げた。それに対して、OPYは、最も楽しむことができた経験として、異なる文化について学ぶことができたことや、PYとの会話であると回答した。委員会のメンバーによって回収、分析されたこのアンケートは、今後の事業にも役立つことができ貴重なデータとなるだろう。

参加青年からのフィードバック

- 今日の異文化理解セミナーはとても興味深かった。各レター・グループによる寸劇の披露はとても面白く、そして学習に最適だった。このセミナーを非常に楽しむことができた。
- 異文化体験に関する題材の解釈が、各グループによって異なっていた点がとても興味深かった。
- アドバイザーと異文化理解セミナー委員のメンバーに感謝している。異文化理解とは何なのかを体感することができた。セミナーで一番印象に残っている言葉は

- 「リエントリー」だった。この事業のエネルギーを用いて社会貢献する上で、とても重要だと感じた。これからどのような活動をしていくべきか考えるきっかけとなった。
- 寸劇はとても面白く、異文化間の誤解がどのように発生するかを理解することができた。また、下船後の生活で私たちにどのようなことが起こりうるかを学ぶことができた。
- PYの豊かな演技力や表現力にとっても感動した。

委員会としての学び

一人一人の異なる個性が、社会をより豊かにする。今回の異文化理解セミナーで、委員会のメンバーは異文化理解の本当の意味を感じるすることができた。今日のセミナーのお陰で、多元主義（社会の多様性の共存を認め合うこと）を通して私たちが成功を手にするができるということを確認できた。

PYがアクティビティに全力で取り組み、熱意をもって議論し、積極的に参加する姿勢は、委員である私たちを感動させた。異文化について理解することは容易では

ないが、ここでは、その挑戦を楽しんでいる様子が感じられた。言語が互いの文化を理解することの一番の障壁ではないことが証明された。というのも、チームワークや、適切なコミュニケーションと指示、PYの努力により、青年同士の関係はより親密になっていったからである。委員会のメンバーとして、大きな問題に直面することなく伝えたいメッセージを伝えられたことをとても幸いに思う。

異文化体験の内容は個人によって異なる。アンケート

の結果を基に、最も楽しかった異文化理解体験と、最も困難に感じた異文化理解体験を議論の題材とした。例えば、ユーモアの違い、日本でのホームステイ、スリランカでのホームビジット、日本、インド、スリランカの食文化、様々な誤解などが挙げられる。

食文化に関する議論は非常に興味深いものとなった。日本の食文化については、薄味の食事がOPYの間で議論となる一方、インドやスリランカに関しては、PYによっては食べられないほど辛い食べ物があったことが話題となった。また、スリランカのホームビジットでは、ホストファミリーが繰り返したくさんの食事を提供する

ことでPYをもてなしたが、それに居心地の悪さを感じた人もいた。これらが、ホームビジット中にPYが遭遇した困難な場面であった。

一方で、PYは訪問国でのこうした異文化体験を大いに楽しんでもいた。国が変われば、そのおもてなしの在り方も変わる。私は異文化体験をケーキのようだと考えている。異なる国から集まる多様なメンバーが、ケーキを色とりどりのデコレーションで飾る。馴染みのある味、そうでない味、両方が混ざったケーキの味と、たくさん色とデコレーションで飾られたケーキを、私たちは楽しむことができる。

アドバイザーからのコメント

今回のセッションは三つの部分から構成された。講義、寸劇、そして異文化理解に関するアンケートの結果発表である。

講義：リエントリーと逆カルチャーショックについて講義を行い、PYが自国に帰り、日常生活に戻ると、どのようなことが起こるかについて話した。PY自身のことであり、これから彼らの身に起こることであったため、ほぼ全てのPYが興味をもって講義に参加していたように思う。最初の10分間が終わる頃には、PYとの意思疎通ができていくことが分かり、集中力を引き出すことができていると感じた。

アンケート：三日前、異文化理解セミナー委員がPYの事業開始前に期待していたこと、現在、期待していることについて尋ねるアンケートを実施した。また、アンケートの中には、楽しかった異文化体験と、困難だと感じた異文化体験に関する質問も含まれていた。このアンケートは、異文化理解セミナー委員によって作成、編集、実施された。

寸劇：委員会は、アンケートの中の回答から得られた、最も困難を感じた異文化体験の上位11個を基に寸劇を実施することにした。PYはレター・グループに分けられ、寸劇のテーマが書かれた紙を引いた。寸劇がどう進むか、また、時間の管理について、少し心配していた。各グループ22人に上る11のグループは規模が大きく、20分という限られた準備時間で、入退場を含めた2分間の寸劇を行うというのは大きな挑戦であった。

寸劇は期待以上の成功を収めた。グループの時間の管理をしつつ、次のグループを舞台袖で待機させるなどの工夫が功を奏した。全グループが時間通りに発表が収まるように準備をした。どのグループも劇の実際のリハーサルができなかったため、即興で演じるなど、柔軟に考え、臨機応変に行動することを実践する良い機会となっ

た。劇の最後には、各グループでこの劇での結果や学びを解説した。

アンケート結果の発表：全てのPYを対象としたアンケートの結果を発表した。回収したデータを分析し、結果をグラフにしてプレゼンテーション形式で共有した。OPYにとって一番困難だった異文化体験がNYCで過ごした期間であり、意外な結果となった。そしてJPYにとっての困難は、OPYとの交流に伴う語学や異文化の壁であり、これは回答として挙げることは想定していたものの、一番多いとは思っていなかった。このデータは次回以降の事業において、JPYやOPYの両者にとってどのようなことを挑戦と感じるかを理解するために非常に有益だろう。興味深く、また有益な結果が得られるPY主導のプロジェクトだったため、その結果を寸劇の題材にも応用した。

セミナーのまとめとして、寸劇にユーモアを使うことの難しさについて解説を加えた。異文化について語るとき、冗談やユーモアを扱うことには注意が必要である。一方で、ユーモアは人生や社会にとって重要な要素であり、口に出すこと全てを気にしすぎると人生は彩のない、退屈なものになってしまう。注意は必要だが、全ての言葉に過剰な心配をする必要はないということ、劇中のユーモアは有効であったことを伝えた。全体を通して、限られた時間で200名を超える人数が実施する寸劇としては成功を収めた。

まとめ：三部構成は期待していた以上にうまくいった。セミナー後に話したPYによると、リエントリーについて、船で過ごす最終週に聞いたことは、良いタイミングだったと感じていたようである。寸劇の成功には、全てのPYを対象とした異文化理解に関するアンケートの成果が大きく貢献している。最終回として行われた今回の異文化理解セミナーも充実した内容だった。

リーダーシップ・セミナー

リーダーシップ・セミナーは、以下の成果をねらい、全PYが参加するセミナーを4回実施した。

- グローバル社会において、リーダーとして活躍するための心構えを身に付ける。

- リーダーシップの概念や、グローバルな環境で必要とされているリーダーシップのスキルについて整理し、理解できるようになる（調整力、公平性など）。
- 事業での経験をいかして、自身がグローバルリーダーとしてそれぞれの現場で活躍できるような能力を養う。

1 リーダーシップ・セミナー

このセッションの目的

最初のリーダーシップ・セミナーのテーマはいかに自分の力を引き出すかについて学ぶことである。そのため、まずは今リーダーシップの世界で起きているパラダイムシフトについて、続いて多元型リーダーシップにつ

いて学び、「全員がリーダーである」ことを理解してもらおう。そして「内なるリーダーシップ」を発揮する上で、その源となる人生の目的とスタンド（信念・拠り所）についてそれぞれのPYに探求してもらおう。

内容

講義の初めに、アドバイザーの榎本英剛先生はPYに向けて「あなたを生き生きとさせるものは何ですか？」という問いを投げかけた。PYは5人の異なる相手とペアを作り、この問いへの答えを交換した。PYたちを元気づけたこのアクティビティは、まさに榎本先生の「リーダーシップ」の考え方の一端を表している。

その後、榎本先生から全4回のセッションの概要について説明があった。第一回目となる今回のセッションでは、いかに自分自身の力を引き出すかという点に焦点を当てた。第二回のセッションのテーマは「いかに他者の力を引き出すか」、第三回のセッションのテーマは「いかに世界の力を引き出すか」となる。また、セミナーの締めくくりとなる4回目のセッションのテーマ及び内容は、リーダーシップ・セミナー委員会によって決定される。

次に、リーダーシップのパラダイムシフトに関する講義を受けた。始めに、榎本先生はリーダーシップが何に帰属するかについて言及した。榎本先生によると、リーダーシップは「地位」ではなく「人」に帰属するものへと変遷している。従来は、ある集団の中で「社長」や「マネジャー」といった高い地位に就いている人のみがリーダーシップを発揮すると考えられてきた。しかし、現在はその人の地位にかかわらず全員にリーダーシップを発揮することが求められるという。加えて、リーダーに求められる役割も変化しつつあるという。これまでは何かを「強制」することがリーダーの仕事であったが、現在はそれが「巻き込むこと」へと変化している。榎本先生の考えにおけるリーダーの役割は、ほかのメンバー

が率先して物事に取り組めるよう働きかけることである。また榎本先生は、リーダーはメンバーがより自発的に自分の力を発揮できるように「先生が自分に何をしてくれるのか」ではなく、「自分は先生に対してどのように貢献し得るか」を自分に問わなければならないと述べた。そうすることで、誰もが自分自身のリーダーシップを発揮できるようになるというわけだ。

その後、榎本先生は「多元型リーダーシップ」の紹介を行った。先生によれば、リーダーシップの在り方にはいくつかの異なるタイプがある。それは「前からのリーダーシップ（Leadership from Front）」、「横からのリーダーシップ（Leadership from Beside）」、「後ろからのリーダーシップ（Leadership from Behind）」そして「内からのリーダーシップ（Leadership from Within）」である。

その後榎本先生は、前半の講義の振り返りとして「講義前半の内容はあなたにどう響きましたか？」という質問を投げかけた。PYは小さなグループに分かれてこれに対する回答を共有し、何人かが各自の意見を全体に向けて発表した。

15分の休憩時間の後、リーダーシップの源についての講義でセッションは再開した。榎本先生は、リーダーシップはその人の在り方や人生の目的に基づいて発揮されるが、後者はまさにその根幹をなすものとした。人生の目的について考えるために、「墓碑銘のエクササイズ」と呼ばれるエクササイズを行い、それぞれが自分の人生をどのようにとらえているかについての理解を深めた。榎本先生によると、リーダーシップは人生の目的に

基づくスタンドからも生み出され、よって人生の目的について考えることは自分のスタンドがどこから来るか知ることでもある。更に、信念というものは私たちがリーダーシップを発揮したいという衝動をもたらすことから「リーダーシップは、あなたが自分を良く見せることよりも何か大事なことを作り上げているときに発揮される。」と述べた。

最後に、榎本先生はPYの学びを最大化するための方法を紹介した。それは、「意図から行動へ、行動から振り返りへ、振り返りから統合へ」という一連のサイクルのことを指している。また次回までの課題についての連絡も行われた。それは「自分の信念を常に意識し、常に自分自身に『今、私自身は何を大事にしているか?』と問い続けること、そしてできるだけ自分の衝動に従って行動すること」である。

主な学び

「リーダーシップのパラダイムシフト」

リーダーシップの概念は下記のように新しい形へと変化している。

1. 今まで地位によってリーダーになる人は決まっていたが、その人の魅力や信念によってリーダーが決まるようになる。
2. 今までリーダーはグループの他のメンバーに仕事や役割を「強制」していたが、それが「巻き込むこと」に変化していく。
3. これまでリーダーは「何をするか」を問われてきたが、今後は「どうあるか」を問われるようになる。
4. 今までリーダーは指示・命令することでグループを動かしていたが、今後はメンバーに対する支援・貢献がリーダーのすべきことである。
5. 今までのリーダーはグループの中の少数人であったが、今後はメンバーの一人一人がグループのリーダーである。

「多元型リーダーシップ」

- リーダーシップの発揮の仕方には、いくつかの異なる次元がある。それらは、「前からのリーダーシップ」「横からのリーダーシップ」「後ろからのリーダーシップ」である。それに加え、リーダーは常に「内からのリーダーシップ」を発揮する必要がある。

「全ての人々がリーダーである」

- リーダーは完全である必要はない。それぞれの強みをいかしたリーダーシップの在り方が存在するため、各自が置かれた状況に対して当事者意識を持ち、必要があればいつでもリーダーシップを発揮できるよう準備しておくことが重要である。

「リーダーシップの源」

- リーダーシップの源はいくつかあり、リーダーの魅力、人生の目的、そしてスタンド（信念、拠り所）を含む。スタンドは人生の目的に根差しているため、人生の目的について考えることは、自分のスタンドがどこから来ているかを知ることにもなり、それは私たちが何らかの行動を起こすことを促す。

「今回の学びを最大にするために」

- 行動を起こす前に意図を持つことはとても重要である。また行動を起こした後には振り返りをする中で、学びが統合される。つまり、それは意図から行動へ、行動から振り返りへ、振り返りから統合へ、というサイクルになっているのである。リーダーシップを発揮するには失敗を怖がらずに自分の快適ゾーンから踏み出す必要がある。

参加青年からのフィードバック

- 「私は皆の前に立って引っ張るタイプのリーダーではなかった。しかし、このセッションの後、私の意識は変わった。私は今、以前よりもずっと強く自信を持っているし、そこから多くのものを引き出したいと思っている。また、リーダーになるためには強くなり過ぎる必要はない。柔軟性さえあれば大丈夫である。」
- 「私はリーダーシップを発揮できるあらゆる機会においてリーダーとして働いてきたが、今回のセッションは「スタンド」の重要な概念を始めとして、私を異なる視点からの新しい考え方へと導いてくれた。これま

で国際的なコミュニティの中で交流する機会をあまり多く持てなかったため、私たちはリーダーシップについてあまりにありきたりな態度で語ってきた。先生の姿勢を知り、私は今、自国で自分が所属しているコミュニティのために自らに合った形のリーダーシップを構築できると確信している。」

- 「これはまさに今必要とされている考えであり、私たちは世界各地から集まった多くの人と共にこれを実践する機会を持つことができた。この経験は今回の研修を非常に素晴らしいものにしてくれた。」